

## 教員養成 FD 活動推進委員会 報告書

—2026 年 3 月—

---

### 目次

#### I FD 活動推進委員会の活動

1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的な FD 活動の推進
2. 学部・附属学校園連携推進室教員養成 FD 活動推進委員会の構成
3. 今年度事業計画
  - (1) 学部教員への案内
  - (2) 対象事業
  - (3) FD 参加登録および FD 発表登録

#### II 事業報告

1. 附属学校園・公開研究会
2. 教育実習 A, C, D および幼稚園教育実習
3. 附属小学校・提案授業及び授業研究会
4. 附属学校園における大学教員の公開授業
5. 新任教員 FD 研修会

#### III 活動報告

1. FD 活動推進委員会の会議報告
2. 新任教員の活動報告
3. FD 発表報告
  - ・大型テレビの活用 紺谷正樹
4. 推進委員の報告：附属中学校の研究活動について

#### IV 編集後記

FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義

## I FD 活動推進委員会の活動

### 1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的な FD 活動の推進

委員長 紺谷正樹

2006 年 7 月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中では、「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間で共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘された。また、国立大学法人の第 1 期中期目標期間終了を踏まえ、2009 年 6 月 5 日に文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では、「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されている。

このような背景のもと、本学教育学部では、当時の推進委員会が、教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適した FD プログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し、2011 年 4 月から「教員養成 FD センター（以下、「FD センター」）」がスタートした。2017 年 8 月の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では、「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして、「国立教員養成大学・学部において、研究者教員が一定期間、学校現場での教育実践研究の経験を積むことや、学校現場との共同研究を実施すること等について、時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等、教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと」が示されている。また、群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも、FD センターに関する計画として「教員養成 FD センターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について検討する」（2016 年度）が明記され、2021 年度に至るまで「教員養成 FD センター（2020 年度より教員養成 FD 活動推進委員会と改称）を活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について実施する」ことが示された。

このような提言や計画等からは、教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることが窺える。一方で、このような研修に該当する機会は、学部・附属学校園が連携する活動の中に、既に少なからず存在している。たとえば、附属学校園の公開研究会や教育実習、学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等である。そこで、それらに FD の視点で大学教員が参加し、教育内容・方法や教育実践に資する自らの学びや気づき等を記録・報告する仕組みをつくることで実践的な FD の機会と位置付けるべく、2017 年度より FD センターとしての事業を実施してきた。その際、学部教員に対しては、次のような案内を行っている。

**【学部教員に発出した案内文書（2017年度）】**

学部・附属学校連携室教員養成FDセンター（以下、FDセンター）は、「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し、教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し、教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在、附属学校園と連携した活動を行っておられる先生は多いと思います。そのような附属学校園と連携した活動には、実質的にFD活動に該当するものが少なからずみられます。

そこでFDセンターでは、附属学校園と連携した活動でFD活動に該当するものについて、FDに位置づけ、それを推進することを本年度の重点取組としました。たとえば、附属学校園における公開研究会について、FDの視点による教員研修の位置づけ（事業計画化、事前案内等）と枠組み（規定様式の報告書提出によるFD参加登録、報告書の管理等）を設けることで、FD参加の機会となり得ます。

これによって、「教員評価」においても、学部・附属学校園の連携活動が「FDへの取組」に該当することが明確化されることとなります。本年度の重点取組の推進によって、FDセンターの目的の達成をはじめ、学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように、ご理解とご協力の程、宜しく願いいたします。

なお、具体的には、添付しました「学部・附属学校園連携によるFD活動（案内）」「FDセンター事業計画（概要）2017年度」「FD参加報告書（様式1～3）」をご覧頂ければと思います。

2020年度より、教育学部が共同教育学部に改組されたことに伴い、学校教育臨床総合センターも教育実践センターに改められた。同様に、「教員養成FDセンター」は「教員養成FD活動推進委員会」へと改称された。

新たな教育実践センターでは、よりよい組織を目指し、業務内容の見直しやスタッフの拡充などを行ったが、教員養成FD活動推進委員会の目的や業務内容に大きな変更はない。これまでの取組を基盤とした活動の継続性を大切にしたい。

今年度、学部教員提出のFD参加報告書数は、以下の通りである。

公開研究会に関する報告書数は10件、  
教育実習に関する報告書数は13件、  
授業公開・研修会に関する報告書数は9件、  
新任教員FD研修会に関する報告書は11件、合計43件

今後は、これまでの取組の一層の推進と充実を図り、学部教員に実践的なFDの機会をよりよく提供するとともに、学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業をすることが当たり前の光景になることに貢献できるよう、努めていきたいと考えている。

## 2. 学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会の構成

【委員長】	共同教育学部教育実践センター	：紺谷 正樹
【副委員長】	共同教育学部附属中学校	：校長 栗本郁夫
【運営委員】	共同教育学部附属中学校	：教頭 三好和人
	共同教育学部英語教育講座	：津久井 貴之
	共同教育学部音楽教育講座	：伊藤 陽
	共同教育学部教職リーダー	：村上 慧
	共同教育学部教育実践センター	：吉田 浩之
	共同教育学部教育実践センター	：安藤 哲也

## 3. 今年度事業計画

### (1) 学部教員への案内

共同教育学部 教員各位

学部・附属学校連携推進室  
教員養成 FD 活動推進委員会

#### 学部・附属学校園連携による FD 活動（発表・参加）に関する事業計画

学部・附属学校連携室教員養成 FD 活動推進委員会（以下、FD 推進委員会）は、「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し、教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し、教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在、多くの先生方が附属学校園と連携した活動に取り組まれていると思います。そのような附属学校園と連携した活動には、実質的に FD 活動に該当するものが少なくありません。そこで FD 推進委員会では、附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものを FD として位置づけ、推進しております。

たとえば、附属学校園における公開研究会は、FD の視点から言えば、教員研修の位置づけと枠組みを設けることで、FD 参加の機会となります。これによって、「教員評価」においても、学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確になります。

こうした取組を推進することによって、本 FD 推進委員会の目的の達成をはじめ、学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように、ご理解とご協力の程、よろしくお願い致します。

なお、具体的には、添付しました「学部・附属学校連携推進室教員養成 FD 活動推進委員会 今年度事業計画（概要）」をご覧頂ければと思います。

## (2) 対象事業

### ① 附属学校園・公開研究会（FD 参加）

- 幼稚園【11 月】
- 小学校【6 月】
- 中学校【10 月】
- 特別支援学校【11 月】

### ② 教育実習 A, C, D および附属幼稚園教育実習（FD 参加）

期間：教育実習 A, C, D および附属幼稚園教育実習の全期間

### ③ 附属小学校・提案授業及び授業研究会（FD 参加）

期間：11 月～2 月

### ④ 附属学校園における大学教員の授業（授業者は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：附属学校園の計画による

### ⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：附属学校園の計画による

### ⑥ 新任教員 FD 研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：FD 活動推進委員会事業計画による

## (3) FD 参加登録および FD 発表登録

FD として参加したこと（FD 発表・FD 参加）の登録を希望する場合は，FD 参加報告書に記入し，教育実践センター事務補佐員品川まで提出する。提出方法は，Google 社の Forms に入力する。URL は，以下のとおりとする。

<https://forms.gle/2ykWzM2kjSYqL1627>

提出期限は，参加した期日から 2 週間以内とする。Google 社の Forms に入力を持って，FD 参加登録となる。「教員評価」の「FD 参加」の資料として事務局（教育実践センター）でデータ保存となる。

### ① 附属学校園・公開研究会の場合

2 日間連続で開催される 1 つの公開研究会に，2 日間参加した場合については，1 つの公開研究会で FD 参加登録のカウン트는 1 回となる。たとえば，附属小学校公開研究会（2 日間開催）に，1 日の参加で 1 回のカウンツ，2 日間ともに参加した場合でも 1 回のカウンツとなる。

### ② 教育実習の場合（教育実習 A のみ特別協力校を含む）

1 つの教育実習の期間中で複数回の参観日があった場合については，1 つの教育実習で FD 参加登録のカウンツは 1 回となる。たとえば，教育実習 A で 1 回，教育実習 C で 1 回となる。

**③附属小学校・提案授業及び授業研究会の場合**

1つの提案授業及び授業研究会に参加ごとにFD参加登録のカウントは1回となる。

**④附属学校園における大学教員による公開授業の場合**

同じ授業者による同じ内容の授業が複数回実施され、その授業を複数回参観した場合には、FD参加登録のカウントは1回となる。

**⑤附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会の場合**

各附属学校園単位以上で、教員研修会として位置づけ開催した研修会の担当講師の大学教員は、FD発表となる。(当該教員研修会を学部教員に事前に案内する)

**⑥新任教員FD研修会の場合**

研修会では、学部・附属学校園の連携活動に関連する内容を取り上げ、また附属学校園の教員がメンバーとして参加し意見交換等を行うため、FDとして有意義な機会となる。主として新任教員を対象としているが、それ以外の学部教員へも参加を案内する。研修会で講師の大学教員は、FD発表となる。(当該研修会を学部教員に事前に案内する)

## Ⅱ 事業報告

### 1. 附属学校園・公開研究会

運営委員 津久井貴之

#### (1) 事業概要

開催日	学校種	事業	内容等
6月12日 13日	小学校	公開研究会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究主題：共によりよい生活を創造する子どもの育成～非認知能力「自信」を深める学びのデザイン～</li> <li>・19の公開授業と授業研究会、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をどう捉えるかに関する講演会が開催された。</li> </ul>
10月9日 10日	中学校	公開研究会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究主題：実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成～エージェンシーを発揮し、生徒自身がデザインした探究的な学びを通して～</li> <li>・20の公開授業と授業研究会、「総合的な学習の時間」に関するワークショップ、OECD ティーチングコンパスに関わる講演会が開催された。</li> </ul>
11月7日	特別支援学校	公開研究会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究テーマ：自分の思いや考えをもち、社会とのかかわる児童生徒の育成～子どもが願いの実現に向かう中で、思いや考えを巡らせる授業実践～</li> <li>・小・中・高等部で一般授業と提案授業合わせて6授業が公開され、それぞれ意見交換会と授業研究会が実施された。また、知的障害のある子どもの自立と社会参加をテーマに講演会・意見交換会が開催された。</li> </ul>
11月8日	幼稚園	公開研究会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究主題：あきらめないでやり遂げる幼児の姿を育む保育―「必要な力」を培うための環境の工夫―</li> <li>・3～5歳児の公開保育・保育を語る会、また、「非認知能力を育み、『つながる学び』で未来を拓く」をテーマにパネルディスカッションが開催された。</li> </ul>

(2) 概要報告（報告書の記述より） ＊紙面の都合上、一部抜粋。

以下に、提出された報告書から参考になる記録や所見等を一部掲載する。

① 幼稚園

- ・園児と教員のやり取りの様子から学ぶことがあった。

② 小学校

- ・公立学校の先生方との意見交流が大変有意義であった。公立学校の先生方の困り感を解消していけるような授業づくりを、附属の先生方とともに考えていきたい。
- ・教科の特性上正答がないゆえ、児童が自身で目標を設定することの大切さや難しさ、そして、学びを促すための教師の振る舞い、発話などがとても重要であることを再認識した。そして、実習が中心となり、作品の中に展開されていくため、それら目標の事柄は見失いがちになる。ITを使用した振り返りの工夫・活用によって、児童各々で確認、再認識が行われていることは大学教育でも参考になった。他方、本教科における「自信」とは何か、効力感、自己肯定感とともに、本教科での学びを考えていく上で再度問い直しを行う必要があると考えた。

③ 中学校

- ・未来創造科では、発表に対してゲストティーチャーが鋭い視点で講評しており、貴重な経験ができる場だと感じた。
- ・初日に続き未来創造科を参観したが、沼田中とオンラインでつないで生徒同士が意見交換をしており、より探究の深まりが期待できると感じた。離れた場所であってもオンラインでつながる良さを改めて実感した。
- ・エージェンシーや「単元の課題を設定する」ことなど新たな挑戦に敬意を表しつつ、H29 告示の学習指導要領における「問題発見・解決の過程」の趣旨や、その過程と資質・能力の関係の整理が不十分なままであるような印象を受けた。
- ・音楽の授業を参観した。ICT機器を授業で活用しながら生徒の学習成果を共有させ、クラス全体で授業目標に迫る指導が展開されていた。

④ 特別支援学校

- ・発達段階が異なる子どもたちが1つの教室にたくさんいる中で、個に応じた指導の難しさを改めて感じた。
- ・生徒らの興味関心を潰さないような、従業者、T2の関わり方が印象に残った。個々が色や形、光に当てたり重ねたりして美術的な感じ方・考え方に没頭して良かったが、一方どのように生徒同士が関わりを持つようにするか、課題の一つだと感じた。
- ・特別支援における環境の構成や手立ては、通常学級でも大変参考になる部分が多い。

## まとめ（報告書を拝読して）

今年度の報告書からは、学校種の違いを超えて、子どもの学びを丁寧に見取り、その可能性を引き出そうとする実践の積み重ねがうかがえた。幼稚園や小学校では、遊びの中で子どもが自ら活動を選び、他者とかかわりながら学びを深めていく姿が印象的であり、特に小学校では、子どもの意識に即した授業づくりや振り返りの工夫、他者と協働する力を支える環境設定の重要性が示されていた。中学校では、教科横断的な学びや探究的な学習、ICTを生かした交流や共有を通して、生徒の主体性や学びの広がりを支える実践が見られた。さらに、特別支援学校における子どもの表出の見取りや支援の工夫は、通常の学級を含むすべての教育実践に通じる示唆を与えている。こうした記録を通して、子どもが何を感じ、何に向かおうとしているのかを捉えながら、教師が学びの場を構成し直していく営みそのものが、各校園の実践の根底にあることを改めて感じた。

こうした実践を通して改めて感じるのは、多様な子どもたちの学びを支えるうえで、個に応じた支援と協働的な学びの場づくりとを往還させる視点、そして安心して学びに向かえる環境を整える視点の重要性である。次期学習指導要領に向けた論点整理においても、多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものにするのが大きな方向性として掲げられ、そのために「多様性の包摂」と「主体的・対話的で深い学び」の実装を、実現可能性の確保と併せて三位一体で進めていく必要性が示されている。

また、「個別最適な学びと協働的な学び」の一体的充実や、すべての活動の基盤としての心理的安全性の確保、さらには教師と子どもの双方にとっての「余白」の創出も重要な論点として整理されている。今回寄せられた報告の中にも、子どもの実態に即した調整、学びを支える環境づくり、ICTを活用した振り返りや共有など、こうした方向性と響き合う実践が随所に見られた。今後もこれらの動向を注視しながら、附属学校園における実践と大学での教員養成との往還をさらに深めていきたい。

結びに、ご多用の中、公開研究会へのご参加と丁寧なご報告をお寄せくださった皆様に、心よりお礼申し上げます。お寄せいただいた記録や所見は、附属学校園における実践の価値を改めて示すものであるとともに、今後の教員養成や授業改善を考える上でも大変貴重な示唆に富んでいました。今後とも、こうした学びの蓄積を大切にしながら、附属学校園と大学との連携をさらに充実させてまいりたいと考えております。

## 2. 教育実習 A, C, D および幼稚園教育実習

推進委員 安藤 哲也

### (1) 事業概要

本事業の目的は、附属学校園等の協力のもとに実施されている教育実習の参観を通して、本学部教員の主体的な気付きを促すことにある。

(1) 教育実習 A	
①附属小学校	9月4日(月)～10月8日(水)
②前橋市立荒牧小学校	8月29日(金), 9月3日(水)～10月3日(金)
③前橋市立桃川小学校	9月3日(水)～10月6日(月)
④附属中学校	8月22日(金)～9月25日(木)
⑤伊勢崎市立第三中学校	9月2日(火)～10月3日(金)
(2) 教育実習 C	11月26日(水)～12月9日(火)
(3) 教育実習 D	9月3日(水)～9月25日(木)
(4) 幼稚園教育実習	1月13日(火)～1月30日(金)

### (2) 報告

ここで紹介する報告は、あくまで教員養成 FD 活動推進委員会宛に提出された FD 参加報告書のうちのごく一部であり、教育実習を参観しても報告されていない件数は多々あると予想されることを付記しておく。

報告書の「教育の内容および方法等に関連して参考になった点」に記述された内容は、①教育実習に対する理解、②授業の在り方に関する考察、③学生に対する理解、④大学の授業への還元の4つに大別できた。それぞれ具体的な記述を以下に抜粋して掲載する。

#### ①教育実習に対する理解

- ・附属学校と協力校との実習内容の違いは以前からあったが、教育実習は、教員の楽しさを感じてもらえればよいと思うので、現在の内容でよいと思う。
- ・附属中学校に訪問し、教育実習 A の授業づくりの様子や実習の授業を参観した。実習生は、教科及び学年ごとにチームとなり、教材の作成をしたり、模擬授業をしたりと、実習生同士で学び合う姿が見られた。実習生たちは、自分たちで検討した教材を用いて授業を行い、授業検討会を通して、自らの授業実践を省察するというよいサイクルを生み出していると感じた。
- ・授業者(実習生)の努力を労い、指導の先生方に感謝を伝え、よりよい授業への助言

を行った。

## ②授業の在り方に関する考察

- ・鑑賞授業における能動的な鑑賞にはどういった方策が考えられるのかを意識した。
- ・英語の授業の参観であった。ALTとうまく連携をとりながら授業を進めていた。英語ゲームのどの点に焦点化するかについて改善点があるように思われた。
- ・板書による児童への意識づけと集団による創造性発揮の可能性を明確に。
- ・代表授業を担当した研究室学生の活動を参観し、国語の授業のあるべき姿を考えた。
- ・地理・歴史・公民の3分野のそれぞれの授業について、附属中の教諭、本学部の教員・学生と授業内容に関する討議ができ、学習目標の立て方、教科内容の捉え方、指導のあり方など、今後の参考になることが多かった。
- ・実習生と先生方の授業を参観し、指導技術に差があるのは、授業中の子供の学習状況の見取りとねらいを達成するための生かし方であると感じた。指導者がどのように子供の発言や表現を受け止めて解釈し、個別に支援するのか、または全体に問いかけるのか、など子供の学習状況を改善するための指導・支援が重要であることを再認識した。
- ・実習学生は、最初に全体に対して本時のめあてを示し、児童はそれを理解している様子であった。モニターと黒板を使い分け、生徒とのやり取りを行いながら授業を進めていた。ワークシートも使い、うまく流れていた。最終的にやや時間が足りなくなり、早口になってしまう場面も見られたが、全体としては良い授業であったように思う。

## ③学生に対する理解

- ・副免許の実習ではあったが、学習グループの構成児童の特性をそれぞれ捉えて、一人ひとりに向き合っていて関わっていたとみとれた。
- ・小学1年生対象の国語の授業でしたが、子どもたちの学ぶペースと興味関心を持続させることの難しさを感じた。授業研究会では教頭先生や実習担当教員からも示唆の多い指導をいただき、バランスをとりながら助言を行った。
- ・1年生の気持ちをよく受け止めながら進めていた（児童の発言を板書に取り入れるなど）
- ・生徒の実態に合わせた授業時の留意点を、実習生へ伝えた。
- ・タブレットをうまく使っていた（ノートへの書き方指導など）。
- ・一人で作業するところ、他の児童と作業するところを使い分けていた。
- ・作業する時間の管理がよくできていた。
- ・児童で教え合う「ミニ先生」をうまく活用していたが、他の同級生から教わることで自尊心を傷つけられたのか、同級生に教わることを拒否する児童もいたため、活用の

仕方に気を付ける必要がある。

- ・学生がこれまでの大学の知識をどのように活用し、実習生として取り組んでいるかを、授業実践を参観すること、その後の研究会で確認することができた有意義な時間であった。
- ・授業参観を通して言えることは、授業者の数学の知識の未熟さである。その未熟さにより、授業において、子供たちの思考を止めたり、強引に進めたりする傾向にあることが見てとれた。いかに大学で学ぶ数学の内容が重要であることを伝えるかが、私にとっての一つの課題であると思った。

#### ④大学の授業への還元

- ・特支での実習生の授業参観の機会はこれまで少なかったので、勉強になった。
- ・地理・歴史・公民の3分野のそれぞれの授業について、附属中の教諭、本学部の教員・学生と授業内容に関する討議ができ、授業観察の仕方、指導方法、学習目標の立て方など、参考になることが多かった。
- ・研究会では、現場の先生方に、日頃の授業での教材内容の扱いについて直接伺うことができた。講義において紹介する実践例として貴重である。
- ・小学校3年生での説明文の書き方の授業は、本学での1年生用の教養授業「学びのリテラシー1」での論理的な文章の書き方の講義・演習にもつながっていくが、この小学校から大学への教育内容のつながりを感じ取れたことは、今回の研究授業・研究会での大きな収穫であった。

### (3) 成果と課題

「(2) 報告」で示した①～④の内容からも、大学教員にとって教育実習を参観することの意義が以下のように窺え、それは即ち本事業の成果と考えられる。

1つは、特に、本学部新任教員にとって、学生が教育実習を行うことの意義を体感できる貴重な機会となっていることである。2つは、教育実習生の授業実践を第三者的に参観するだけでなく、自分事として授業実践の有り様を考察する機会としていることである。3つは、大学での姿と教育実習に取り組む姿を重ね合わせながら、学生を多面的に理解するための機会としていることである。4つは、日々の大学での授業内容が学生にどのように身に付いているのかを確認し、よりよい授業を構想するための機会としていることである。

こうした成果に加え、教育実習参観の面からFD研修の充実を意図した場合、意識しておくべきことは、群馬大学に赴任する教員の全てが必ずしも群馬県の教育事情に通じているわけではないことである。このことを踏まえ、附属学校園だけでなく県内各地の学校で行われている教育実習(教育実習B)を参観することが、群馬県の教育について理解を深めるための絶好の機会であることをアピールし、更なる教育実習参観を促していくことが今後における継続的な課題となる。

### 3. 附属小学校・提案授業及び授業研究会

運営委員 島 孟留

附属小学校では、令和7年度より「新たな価値を創造する子どもの育成」を研究主題として設定し、子どもが生き生きと自らの考えを表出できる学びについて研究を進めている。今年度は、副主題を「『あそび』のある学び」として、各教科等の学びを最大限まで、子どもに委ねることを目指して、新たな研究を推進した。

各教科で実践された授業（いずれも直接参観）については、以下の通りであった。

#### 【英語科】

「What can WE do? ～SDGs for Me and You～」(第6学年)

日時：令和7年11月7日(金) 13:15~14:00

授業者：齋藤 一紀

#### 【図画工作科】

「あらら あきうらら (絵に表す)」(第3学年)

日時：令和7年11月10日(月) 13:15~14:00

授業者：貞永 瞳

#### 【体育科】

「おにあそび」(第2学年)

日時：令和7年11月18日(火) 13:15~14:00

授業者：石塚 祐子

#### 【理科】

「金属、水、空気と温度(温まり方の違い)」(第4学年)

日時：令和7年11月20日(木) 13:15~14:00

授業者：吉田 和気

#### 【道徳科】

「正義をつらぬく(『ガンジーのいかり』『光輝の告白』)」(第5学年)

日時：令和7年12月11日(木) 13:15~14:00

授業者：横尾 紗也香

#### 【音楽科】

「いろいろな音のひびきで表現しよう」(第4学年)

日時：令和7年12月12日(金) 13:15~14:00

授業者：紺野 伶音

#### 【社会科】

「世界に歩みだした日本」(第6学年)

日時：令和7年12月15日(月) 13:15~14:00

授業者：中野 智貴

**【家庭科】**

「家族への贈り物を作ろう」(第6学年)

日時：令和7年12月17日(水) 13:15~14:00

授業者：小鮎 祐花

**【算数科】**

「分数」(第2学年)

日時：令和8年1月20日(火) 13:15~14:00

授業者：佐藤 優太

**【生活科】**

「わくわく どきどき ようこそ しょうがっこう！」(第1学年)

日時：令和8年1月22日(木) 13:35~14:20

授業者：飯塚 理志

**【国語科】**

「読む人を意識して構成を考え、物語を書こう(『もう一つの物語』光村図書5年)」(第5学年)

日時：令和8年1月30日(金) 13:15~14:00

授業者：前原 聡

なお、授業研究会については、全授業とも授業日当日の15:25~16:55に行われた。授業研究会における、本研究目的の達成に向けた議論、提案を通じて、本提案授業のさらなる発展が期待された。

業務の合間を縫ってご参加・ご報告いただいた先生方のご意見を、以下にご紹介させていただきます。

**【図画工作科】**

図画工作科の学びとして、教科の特性を踏まえた合理性、効率性が必要とされる一方、それらを超えた創造性を誘発するための授業デザインのあり方について探求する必要性を意識した(指導・助言者として参加)。

## 4. 附属学校園における大学教員の公開授業

運営委員 三好 和人

事業内容（各公開授業等の報告）

① 附属中学校 令和7年9月30日（火） 第1学年4クラス

技術教育講座 准教授 小熊良一

技術 「家を丈夫にする構造について考えよう（材料と加工の技術）」

授業概要

本授業は、「材料と加工の技術」を題材に、耐震構造について考える授業を実施した。模型製作と実験を中心に据えることで、構造の工夫や材料の組み合わせが強度に与える影響を体験的に理解させることをねらいとした。

生徒は、三角形構造や心柱など既習事項を活用しながら考察を深め、学習内容を実際の建築物や社会生活と結び付けて捉えることができた。



② 附属中学校 令和7年10月22日（水） 全学年

音楽教育講座 准教授 山崎法子

音楽 「曲の構成や曲想の変化を生かして歌うために必要な発音・発声を学ぼう」

授業概要

本授業は、合唱コンクールの学年合唱を題材に、曲想の変化を表現するための発音・発音について学習した。広い空間で歌う際の課題を踏まえ、子音や母音の発音方法、口の形や視線などを意識することで、声の響きが変化することを体感的に理解させた。助言を生かして主体的に取り組む姿が見られ、合唱表現をより良くするための視点を獲得することができた。



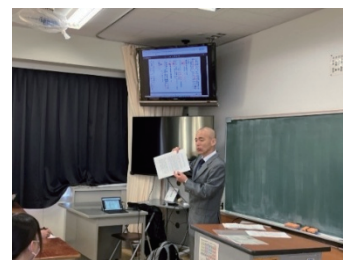
③ 附属中学校 令和8年1月22日（木） 3年生4クラス

国語教育講座 教授 河内 昭浩

国語 「書くことの問題はどのように解いていくのか」

授業概要

本授業は、公立高校入試問題を用い、説明的文章の読み方や記述問題への向き合い方について指導した。接続語やキーワード、対比構造に着目することで、筆者の主張を正確に捉える方法を確認した。また、資料を基に自分の経験と関連付けて記述する活動を通して、論理的に考え、表現する力を高めることができ、今後の学習や受験に向けた見通しをもたせる授業となった。



- ④ 附属中学校 令和8年1月26日(月) 第3学年4クラス  
数学教育講座 教授 高江洲 俊光  
数学 「物体の落下について」

授業概要

本授業は、物体の落下運動を題材に、水平方向と垂直方向の運動を分けて考察し、それらを数式で表現することで、放物線運動になることを理解させた。既習の放物線や理科での学習と関連付けながら考えることで、数学的な見方・考え方の有用性を実感し、現象を予測する力の育成につながった。



- ⑤ 附属中学校 令和8年2月3日(火) 第2学年4クラス  
社会科教育講座 教授 青山雅史  
社会 地形図からみる防災

授業概要

本授業は、学校周辺地域を対象に、地形図やハザードマップを活用した防災学習を行った。身近な地域の様子を多様な資料から読み取ることによって、地域の特性と防災との関係について理解を深めた。

災害伝承碑などとも関連付けながら学習することで、自分たちの住む地域への関心を高め、防災意識の向上を図ることができた。



- ⑥ 附属中学校 令和8年2月4日(水) 第3学年4クラス  
理科教育講座 准教授 佐藤綾  
理科 AIvs 附中生～チョウを見分けられるのはどっちだ!?～  
授業概要

蝶の分類活動と生成AIとの比較を通して、科学的に判断する力を育成する授業を行った。観察やスケッチなどの活動を基に、生徒自身が根拠をもって判断する経験を重ねた。その結果、AIの情報を一つの意見として捉え、自分の考えと照らし合わせながら活用していく姿勢について考える契機となった。



- ⑦ 附属中学校 令和8年2月16日(月) 第1学年4クラス  
保健体育教育講座 教授 木山慶子  
保健体育 フォークダンス(八木節)  
授業概要

本授業は、八木節を題材としたダンスの授業を行い、日本の伝統的な踊りの特徴を理解するとともに、仲間と協働して表現を創作する活動を取り入れた。動きの工夫や道具の活用を通して、表現する楽しさや互いのよさを認め合う態度が育まれた。



- ⑧ 附属中学校 令和8年3月3日(火) 第2学年4クラス

数学教育講座 准教授 大下 達也

数学 四則演算と作図問題

授業概要

本授業では、「数と式」と「図形」の領域の関連に着目し、四則演算を作図によって表現する活動を行った。既習の作図方法を図形の性質に基づいて再考し、証明的に捉え直すことで、学習内容の理解を深めた。さらに、相似や方程式との関連にも触れ、学年間・領域間のつながりを実感する機会となった。



⑨ 附属中学校 令和8年3月10日(火) 第1学年4クラス

数学教育講座 教授 石井 基裕

数学 背理法と無限

授業概要

本授業では、背理法を用いた論理的な証明の方法を扱い、素数の無限性について考察した。また、自然数や偶数などを比較することで、無限の概念にも種類があることに触れた。生徒は、論理を積み重ねて結論を導く数学の特質に触れ、思考の深まりを見せた。



⑩ 附属中学校 令和8年3月3日(火)、10日(火) 第1学年4クラス

美術教育講座 教授 林 耕史

美術 こんにちは 彫刻

授業概要

本授業では、「彫刻とは何か」という問いを出発点に、生徒の既存の概念を見直す活動を行った。写真資料や対話を通して価値観を相対化し、造形活動では素材との対話を重視した表現を展開した。これにより、生徒は固定観念にとらわれない思考と表現の重要性を理解した。



⑪ 附属特別支援学校 令和7年11月25日(火) 小学部 中学部・高等部

保健体育講座 教授 木山 慶子

体育分野 「ダンス交流」

授業概要

大学生とのダンス交流を通して、体を動かす楽しさを味わい、余暇活動につなげることを目的に実践を行った。

小学部では、『エビカニクス』で準備運動後、子どもたちが学生に踊りを披露し、互いにまねしながら踊った。動きでじゃんけんをする活動では、相手の動きを見て考え、身体で表現する姿が見られた。覚えた動きを『ジャンボリーミッキー』に合わせ、全員で楽しく踊った。中学部・高等部では、教師と学生のダンスを見て期待を高め、



「中学部：グループでの表現」

『ライラック』で準備運動を行った。その後、「動物」「乗り物」「自然」をテーマに身体表現を行い、創作ダンスを発表し合った。活動を通して、友達同士や学生との関わりが広がり、表現する喜びを共有できた。発達段階に応じた支援により、初対面の人とも楽しんで表現する姿が見られ、教員の学びにもつながった。

## 6. 新任教員 FD 研修会

推進委員 伊東 陽

### 事業概説と報告

#### ①第1回

期日：2025年4月1日（火）

時間：13時00分～14時00分

場所：共同教育学部6号館102教室

内容：1. 新任教員FD研修の概説説明 (紺谷委員長)

2. 遠隔システムの操作方法の講習 (紺谷委員長)

本年度新任教員FD研修会で研修を行う新任教員は、足達哲也附属小学校校長、栗本郁夫附属中学校校長、城田謙司特別支援学校校長、家政教育講座の鎌野育代氏・中里真一氏、数学教育講座の高江洲俊光氏、英語教育の山内ダーリーン氏、教職リーダーコースの村上慧氏、教育実践センターの佐々木英男氏の9名である。第1回となる研修会では、紺谷委員長による、教員養成FD活動委員会の活動内容や新任教員FD研修の概要の説明、FD活動推進委員の紹介が行われた。

後半は宇都宮大学との遠隔システムの操作方法、LMSの活用方法など、ICT環境の説明があった。新任教員たちからは、「FD研修会について、年間を通して実施されていることや各種事業の構成、あるいは報告書が毎年度交換されているなど、体系的な実施体制が構築されていることが分かるとともに驚いた」、「遠隔授業システムについて理解が深まりました」、「遠隔システムについて、一度で理解するには、情報量も多く難しかったが、講師の先生が分からないときは聞いてくださいというお話しだったので、安心した」、などの感想が寄せられた。本年度は例年よりも新任教員が多いため、今後新任教員FD研修の更なる活発化が期待される。

#### ②第2回

期日：2025年5月13日（火）

時間：16時00分～17時30分

場所：附属中学校1階未来教室

内容：1. 附属学校園について (栗本郁夫附属中学校校長)

2. 附属中学校の研究について (櫻井康之研究主任)

3. 教育実習について (教育実践センター 安藤哲也氏)

4. 附属中の施設見学 (三好和人附属中学校教頭)

栗本郁夫附属中学校校長より、附属学校園の概説についての説明があった。附属学校園の役割や、附属学校園間の交流・連携のさらなる充実のために、附属学校部会でさまざまな共通理解を図っているとのことであった。

附属中学校の研究については、総合的な学習時間を「未来創造科」と改編し、生徒一人ひとりの主体的な取り組み、生徒自身が学びをデザインする様子が紹介された。

教育実習に関しては、本学では1年次より実習の機会を多く持つこと、事前事後指導を通し、学生がより深い学びを得るための充実したカリキュラムが組み立てられていることが説明された。また、教育実習委員の役割・活動も紹介され、さまざまな面できめ細やかに学生たちをフォローしているとのことであった。

参加者は附属学校園、附属中学校の取組を理解し、共同教育学部と附属学校園の連携活動、協力体制の重要性をより強く感じた様子だった。

### ③第3回

期日：2025年7月9日（水）

時間：12時40分～14時10分

場所：共同教育学部6号館106教室

内容：1. 新任教員による附属小学校公開研究会への参加報告・意見交換  
2. C106教室の大型テレビの活用方法について（紺谷委員長）

### ④第4回

期日：2025年11月25日（火）

時間：10時20分～11時50分

場所：共同教育学部6号館102教室

内容：1. 新任教員による附属中学校・附属特別支援学校・  
附属幼稚園公開研究会への参加報告・意見交換

第3回と第4回は新任教員たちが各附属学校園の公開研究会に参加した報告と、意見交換会を行った。日ごろ、教育・研究活動で多忙な中、四校園すべての公開研究会に参加したという報告も複数みられた。報告の最後には「生徒中心の学びと個別最適な学びの推進が具体的に実践されている様子を観察できた」、「附属四校園の研究の方向が一致していることが改めて確認できた」、「自分の専門分野外の方とも意見交換などをすることができ、大変参考になった」などの感想が寄せられた。

また、授業見学だけに限らず、各公開研究会で行われた講演会などについての報告も多数あり、それをもとにインクルーシブな視点や非認知能力、エージェンシーの育成などについての意見交換がなされた。

## ⑤第5回

期日：2026年2月6日（金）

時間：10時20分～11時50分

場所：共同教育学部6号館105教室

内容：1. 藤森学部長のあいさつ

2. 新任教員の1年間の振り返り

3. 意見交換

4. センター紀要投稿の確認

5. 「学部・附属学校連携室

教員養成FD活動推進委員会報告書」作成について

（紺谷委員長）

最後の研修会は、はじめに藤森学部長のあいさつとして、群馬大学の将来のビジョンのために、これからも堅実に教育学部として教員養成に携わる重要性についての話があった。

その後、各新任教から、FD活動について1年間の振り返りの報告があった。村上氏は「附属校ならではの取り組みをいろいろと知ることができた」、中里氏は「附属校で勤務していた時と、大学教員としての視点で附属校を見たときに見方が変わった」、佐々木氏は「自分が初任のころに思っていた附属校のイメージと今の違い、役割などを感じることができた」、鎌野氏は「今後、附属校の先生方とはもちろん、群馬県の公立の学校の先生方との連携もより充実させていきたい」、高江洲氏は「初めて教員養成に関わることになったが、学生たちが懸命に実習に取り組む姿を目の当たりにし、今後も学生たちを応援していきたい」、城田氏は「大学教員が附属学校教員の授業への助言をすることで、教員の授業力が高まる。それが教育実習の学生への指導にもつながるので、今後ともぜひ協力をお願いしたい」、栗本氏は「附属四校園をより魅力あるものにするために、ぜひ大学との連携を強くしていきたい」と話がなされた（安達氏、山内氏は欠席）。

本年度から附属学校長も本研修会に参加することになり、参加者は附属学校園をより身近に感じ、一層の連携・協力の充実を図る決意を新たにした。



（写真1）藤森学部長あいさつの様子



（写真2）村上氏発表の様子

### Ⅲ 活動報告

#### 1. FD 活動推進委員会の会議報告

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
4月1日(火)	5月13日(火)	7月9日(木)	11月25日(火)	2月6日(金)
13:00～	16:00～	12:40～	10:20～	10:20～
C102教室	附属中 未来教室	C106 教室	C102教室	C106 教室
①あいさつ 藤森学部長 ②推進委員・新任教 員の自己紹介 ③質疑・応答 ④遠隔システム・ LMS・教務システム の概要	①附属学校園につ いて 栗本校長 ②教育実習に ついて 安藤委員 ③附属の研究に ついて 研究主任 ④附属中施設見学 教頭	①附属小研究大会 参加報告 ②ICT 機器の活用	①附属中研究大会 参加報告 ②附属特別支援 研究大会参加報告 ②附属幼稚園研究 大会参加報告	①1年間のふりかえ り ②意見交換 ③報告書作成につ いて

#### 2. 新任教員の活動報告

- ・ 家政教育 鎌野育代氏
- ・ 数学教育 高江洲俊光氏
- ・ 英語教育 山内ダーリーン氏
- ・ 家政教育 中里真一氏
- ・ 教職リーダー 村上慧氏
- ・ 教育実践センター 佐々木英男氏
- ・ 附属小学校長 足達哲也氏
- ・ 附属中学校長 栗本郁夫氏
- ・ 附属特別支援学校長 城田謙司氏

## 1 はじめに

私は、令和6年10月よりこの群馬大学に勤務している。附属学校との連携研究はこれまで勤務していた大学においても行っていた。附属学校との連携研究は、実践研究を主な研究の軸としている私にとっては非常に重要である。そういった意味からも附属学校との連携は密なものにしていく必要があるが、今年度はあまりできなかったということが反省点である。ただ、附属学校との連携という点で、最終的には実施までに至ることができなかったが、附属中学校の生徒とその保護者を対象としたロールプレイングの研究を企画できたことを挙げるができる。

そこで、①附属中学校の公開研究会に参加しての気づきや感想、②保護者を対象としたロールプレイングの実施に向けた取り組みについて報告する。

## 2 附属中学校公開研究会に参加して

私は、令和7年10月10日に附属中学校の公開研究会に参加した。研究主題は「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成～エージェンシーを発揮し、生徒自身がデザインした探究的な学びを通して～」で、技術・家庭科の主題は「生活や社会を見つめ、理想とする姿に向けて工夫し創造する生徒」の育成であった。まず研究主題については、エージェンシーとは、変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力とされている。学びを生活の中で実践することが求められる家庭科であることからこの研究主題は、そのまま教科の主題としても問題がないと感じた。また、教科の主題は、「理想とする姿に向けて」とあり、これはグローバルな課題である持続可能な社会の実現に向けてという意味と捉えることができる。しかし、近年の調査では、環境に配慮した行動について、面倒であっても環境のために行動している若者は減少しており、自分一人が環境への配慮をしたところで、何も得られなかったという経験が背景に存在することが報告されている（博報堂，2025）。これらの報告は家庭科としては重要な課題であり、一層の研究の継続が求められる。以上のことから、今年度家庭科が提案した授業は非常に興味深いものであった。内容としては、「不要になった傘を使って作品作りをする」というものであった。授業は、不要となった傘の布を使用して何ができるか構想する時間であった。この学習により、不要となったものを再度使用できるものに作り上げるという経験となるが、今後の生徒のものの見方・考え方に大きく影響を与えるものであると感じた。研究主題の視点から考えてみると、社会とのつながりを意識することが重要であり、この取り組みを社会につなげていくためにはどうしたらいいかという視点で、考えさせていくことが今後の課題ではないだろうか。

### 3 保護者を対象とした研修の実施に向けて

前述したが、保護者を対象とした家庭教育学級の実施に向けて、家庭科担当の教員と管理職との打ち合わせを行い、実施に向けての準備を進めた。最終的には実施することが出来なかったが、令和8年度には実施の予定である。以下は保護者向けの案内の内容である。

家庭教育学級参加のお願い

テーマ：思春期の子どもとのかかわり方  
～家族関係がポジティブになるロールプレイングを通して～

拝啓 大寒の候、保護者の皆様におかれましては、益々ご健勝の事とお喜び申し上げます。

私は、昨年9月末まで島根大学教育学部にて家庭科教育を担当しておりました、鎌野育代と申します。突然のお便りを失礼いたします。

この度、群馬大学共同教育学部附属中学校校長及び家庭科担当 大竹 成美 教諭のご協力のもと、中学校家庭科の家族学習と保護者向けの家庭教育学級を実施することができることとなりました。

さて、社会の急激な変化による家族や地域との希薄化から、中学校家庭科においては、家族や地域の人々とのかかわり方といった人間関係に関する学びが重要視される傾向にあります。私はこれまで家庭科の家族領域における実践研究に取り組み、家族との関係を学ぶ「ロールプレイング」という学習方法が、家族との関係にポジティブな効果があることを明らかにしてきました。その中で、この家族との人間関係は、中学生だけが学ぶのではなく親と子それぞれが同じように学ぶことで、一層の教育的効果が期待できます。

そこで、中学校家庭科において、家族を学ぶ群馬大学共同教育学部●年生の保護者の皆様にこの家庭教育学級の趣旨をご理解いただき、ご協力いただける保護者の皆様に募るためのお手紙を差し上げました。保護者の皆様を対象とした家庭教育学級では、前半は近年の家族を取り巻く諸問題を取り上げ、後半は演習として家族のロールプレイングの演習を計画しております。ぜひ、気軽に参加していただけたらと存じます。ご多用のところ、厚かましいお願いで大変恐縮ではございますが、ご協力を頂きたいお願い申し上げます。なお、ご参加いただける保護者様につきましては、以下の QR コードより、参加申し込みを●月●日（●）までをお願い申し上げます。

敬具

### 4 おわりに

一年間の連携研究の中で感じたことは、群馬大学共同教育学部では、多くの大学教員が附属学校で授業を実施し、その情報が共有されているということである。これは、群馬大学の大きな特徴として位置づけることが出来るのではないかと考える。また、この経験は大学の教員が児童生徒の今を実感し、研究に生かすことにつながり、附属中学校の生徒や教員にとっては大学の教員が授業を実施することで、多くの学びが得られるものとなる。両者にとって非常に意味あるものである。

私も附属学校との連携を様々な形で実現していきたい。

## 1 はじめに

私は大学院に進学して以来、現代数学の立場から数理物理の研究をこれまで行ってきました。群馬大学へは 2013 年 9 月に理工学基盤部門に助教として赴任後、2015 年 4 月に講師、2019 年 3 月に准教授と昇任後、2025 年 4 月に共同教育学部数学教育講座に教授として異動いたしました。

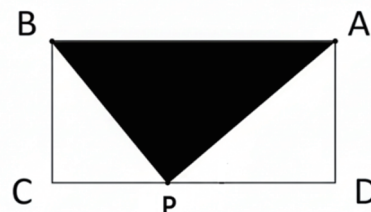
理工学基盤部門では主に理工学部 1 年生向けの講義と理工学府修士課程の共通科目を担当してきました。これらの科目は数学を専攻としない学科の科目でありました。今年度より共同教育学部数学専攻の教員として数学専攻向けの厳密な論理に基づく現代数学の講義を担当しました。現代数学は抽象的でわかりにくいという印象があるのですが、抽象的な定理や命題などにもイメージを持ってもらえるように意識して説明を行い、具体例なども多くとりあげて講義を進めてまいりました。数学専攻の学生は非常に意欲を持って、講義・演習に取り組んでもらえ非常にやりがいを感じています。今後も引き続きこのように意欲を持ってもらえるように講義を進めていきたいと思っています。

## 2 研究授業、公開授業への参加および特別授業について

(1) 9 月 19 日(金) 附属中学校 教育実習 A 研究授業 11:40~12:30

授業題目：図形と一次関数

3 年生のクラスで内容は一次関数と図形である授業を参観しました。右図のように長方形上の点が動いて作られる三角形の面積を考察されていました。まず、生徒にどのようになるか予想をさせ、その後に教員が解説を進めていく流れでした。生徒はまず定性的に「大きくなっていく」とか「小さくなっていく」と気づき、授業が進むにつれ、グラフを用いて実際にどのように変化しているのかを定量的に理解をしていっている印象を受けました。



(2) 9 月 19 日(金) 附属中学校 教育実習 A 研究授業 13:20~14:10

授業題目：日常にあらわれる比例式

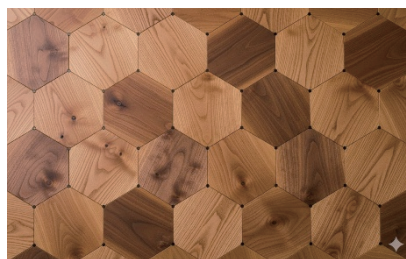
1 年生のクラスの授業で内容は日常の身近にあらわれる比例式の授業を参観しました。具体的にある濃縮された飲料の飲み物を水で割って飲む場面を考えていこうという授業でした。具体的に 1:2 の割合で割ると 1:5 で割るとどう違うのか、また 1:3 と 2:6 の割合は同じであることなどを生徒の反応を見ながら授業を進める姿が印象的でした。



(3)10月10日(金) 付属中学校 公開授業 9:55~10:45

授業題目：平面図形

1年生のクラスの授業で平面図形に関する授業について参観しました。特に平面を図形で敷き詰めていくのが授業の主題で、右図のような平面に敷き詰められている模様がいくつか紹介され、説明の後に生徒たちはグループを組んで実際に準備されたさまざまな図形を実際につなぎ合わせていくという流れでした。どのような意図をもとにして

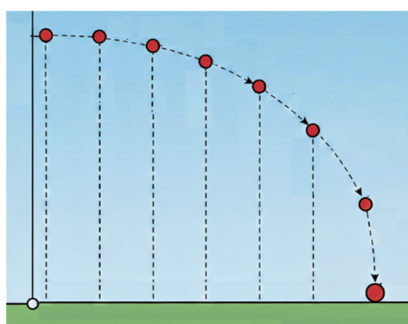


全体の模様を作っていくか話し合いながら行い、また出来上がった模様がどうなっているかをグループごとに比較して特徴を見出していつている印象を受けました。

(4)1月26日(月) 付属中学校 特別授業 9:40~10:30, 10:40~11:30

内容：物体の運動や力に関する歴史的背景や数学的な考え

3年生の2つの合同クラスに対して、上記内容の別授業を行いました。まず、図のようにボールが平投射された場合の軌跡について導入的な説明して、次に中世ヨーロッパにおける物体の運動やについての歴史的説明を行い、最後に現代の視点から水平投射と放物線に関する数学的な解説を行いました。生徒の皆さんの反応から、物体の落下という自然現象が数学の放物線と結びつくという事実の重要性を認識してもらえたのではと思いました。



特  
水  
を  
力  
か  
い  
い

### 3 おわりに

教育学部1年目でしたが、これまで数学専攻向けの講義を担当したことはなく、また現場の学校での研究授業・公開授業なども一度も参加したことはありませんでした。これらの経験を今後の講義・演習およびゼミの指導、そして教育実習の運営などに生かしていきたいと思っています。私としては学生には意欲を持って勉強し、そして自信を持って教員になってほしいという気持ちであり、そのことが分かってもらえるように努めていきたいと思っています。

## 1 はじめに

本年度は、協働教育プログラムに携わる教員としての初年度であり、本学における FD 活動に参加する中で、自身の教育実践や教員養成に対する理解を深める機会を得た。新任教員として大学教育に携わるにあたり、FD 活動は授業改善のための研修という枠組みにとどまらず、自身の教育観や教員としての立場を形成・再考する重要な場であると捉えている。

特に、附属学校園の教育実践に関する報告や意見交換を含む FD セッションへの参加、ならびに協働教育に関連した視聴覚機器・ICT 活用に関する研修は、自身の専門分野である英語教育の枠を超え、教育をより広い視点から捉える契機となった。教育現場の多様性や、学習者一人ひとりの背景に応じた支援の在り方について、大学教育の立場から考える機会となった点は、本年度の FD 活動の大きな成果である。

また、本年度は宇都宮大学との連携授業を含む協働教育科目を担当する立場として、他大学との協働や複数拠点での授業運営を見据えた教育環境づくりについて学ぶ必要があった。FD 活動は、単に個々の授業改善に資するものではなく、教員同士が意見を交わし、教育に対する多様な視点や課題意識を共有する対話の場としても重要な役割を果たしていた。本レポートでは、これらの FD 活動の中から代表的な内容を取り上げ、その概要と学びを整理するとともに、今後の教育実践への示唆について述べる。

## 2 附属特別支援学校公開研究会に参加して

2025 年 11 月 7 日に開催された「第 46 回 群馬大学共同教育学部附属特別支援学校 公開研究会」に参加した。本研究会では、「知的障害のある子どもの自立と社会参加に向けて」を主題とし、子どもが思いや考えを巡らせながら課題解決に向かう授業の在り方について、講演および協議が行われた。

研修の中心的な内容は、知的障害のある子どもたちの主体的な学びをいかに授業の中で育成するかという点であった。判断・想像・行動・振り返りを繰り返す学習プロセスを重視し、失敗を学習の一部として肯定的に捉える姿勢が、自立や社会参加につながる力を育む上で重要であることが示された。特に、大田正己氏の「主体的な学びのプロセスモデル」を用いた説明は印象的であり、学習者が自ら考え、試行錯誤しながら学びを深めていく循環的な学習過程の重要性を再認識する機会となった。この考え方は、特別支援教育に限らず、大学教育においても有効であり、学習者中心の授業設計を検討する上で大変参考になった。

さらに Q&A セッションや参加者同士の意見交換を通して、特別支援教育、美術教育、他大学の教育実践など、英語教育分野では得にくい多様な視点に触れることができた。異なる専門領域の教員との対話は、自身の教育実践を相対化し、教育を多角的に捉える契機となった。

### 3 協働教育に関連するFD活動および附属学校園からの報告

本年度のFD活動においては、附属中学校および附属小学校の教員や関係者による教育実践の報告を聴講する機会が設けられた。これらの報告を通して、附属学校園における教育の現状や課題、ならびに授業づくりの工夫について理解を深めることができた。実際の教育現場の声を大学内のFDの場で共有する取り組みは、大学と附属学校園との連携を考える上で非常に意義深いものであった。

報告を行った教員や、現地での活動に参加した大学教員による振り返りを聴くことで、附属学校園においてどのような学習環境が整えられているのか、また児童・生徒の多様性にどのように対応しているのかについて、具体的なイメージを持つことができた。これらの内容は、大学における教員養成や協働教育を担う立場として、学生にどのような視点を提示すべきかを考える上で重要な示唆を与えるものであった。

また、宇都宮大学との連携授業を含む協働教育科目を担当する新任教員として、視聴覚機器・ICT活用に関するFD研修は特に重要であった。複数拠点での授業運営を想定したモニターやプロジェクターの使用法、映像・音声の共有に関する知識は、円滑な授業実施に直結するものであり、協働教育を支える基盤的要素であることを実感した。

加えて、協働教育に関するFDセッションでは、附属学校園の教育実践を共有するだけでなく、それらを大学教育や教員養成にどのように接続していくかについても議論が行われた。特に、教育段階の異なる現場の報告を基に、学生に求められる資質・能力や、将来直面する教育環境の多様性について考える機会となった点は有意義であった。これらの議論を通して、協働教育における大学教員の役割は、専門知識の教授にとどまらず、学生が教育現場を具体的にイメージし、主体的に学びを深めるための橋渡しを行うことにあると改めて認識した。

### 4 おわりに

本年度のFD活動を通して、インクルーシブな視点や主体的な学びの重要性を、理論と実践の両面から学ぶことができた。附属学校園の教育実践に関する報告や特別支援教育の取り組み、ならびに協働教育に関連するFD活動は、大学における教員養成や連携授業を担う立場として、自身の教育実践を見直す貴重な機会となった。

今後は、これらのFD活動で得た知見を授業に反映させ、学生が将来多様な教育現場や協働的な教育環境に対応できるよう、インクルーシブな視点やアクティブ・ラーニングを意識した授業設計を行っていきたい。また、引き続きFD活動に積極的に参加し、他教員との対話を通して教育実践の質の向上に努めていく所存である。

## 参観した家庭科の授業に焦点をあてて 家政教育講座 中里 真一

### (1) はじめに

次期学習指導要領の改訂に向けた動きもはじまっている中、学校現場に目を向けてみると、現行の学習指導要領は着実に実施されているであろうか。もちろん現場の先生方は、多忙な業務を抱える中でも、児童生徒の資質・能力を育成するために、日々の授業改善を積み重ねており、着実な実施を目指している。しかし、着実に実施しようとすればするほど、子供たちのために、どのように授業を展開すればよいのか、どのような題材を取り上げればよいのか等と悩みを抱えてしまう場合もある。そのような中、この FD 活動において参観した附属小学校および中学校の家庭科の授業は、家庭科を担当する多くの先生方が抱える悩みを解決する一方策であったことから、これらの授業に焦点をあてて報告を行う。

### (2) 附属小学校公開研究会の家庭科授業

小6年家庭科 題材名「マイみそ汁をつくろう」 授業者 小鮎 祐花教諭
------------------------------------

授業概要：本授業は、題材の終末（11/11 時間）であり、家庭実践の取組も含めた題材全体の振り返りを行い、本題材の学びを自分の生活にどのように生かしていくことができるかを考える時間であった。子供たちは、本時の前に行った家庭実践でうまくいったことやうまくいかなかったことを伝え合い、改善のアドバイスをし合っていた。そして、後半は自分の生活への生かし方を伝え合っていた。

現場の先生方の困り感：家庭科に限らず、どの教科等においても、子供たちは解決すべき課題を設定し、試行錯誤しながらその解決を図っていく。しかし、公開授業などで参観する授業の多くは、追究の場面であり、課題をつかむ場面の授業や、題材全体の振り返りを行う終末場面の授業を参観できる機会はあまりない。そのため、題材の課題設定や、題材全体の振り返りをどのように行えばよいか悩んでいる先生方は多い。

本授業のポイント：そのような中、小鮎教諭は、11/11 時間目の授業を公開してくださった。授業中、どの子供たちも、次はどうしていきたいかを発言したくて仕方がない様子であった。ここには、小鮎教諭の丁寧な授業づくりがあるのはもちろんだが、子供たちは一連の学習過程の様々な場面で、自ら気付いたり、考えて判断したりしながら活動を積み重ねてきたことで、本題材の学びが自分事になっていたのである。学びを自分事にするために大切にしたいことの一つは、題材の導入での課題の設定である。小鮎教諭は、題材の導入において、具体的な生活場面を想起する事前アンケートの結果を用いて、子供たちが問題を見いだして課題を設定できるよう導いていた。授業は一単位時間で完結しているのではなく、一連の流れで

つながっているのである。題材全体をデザインすることの大切さとその方法が参考となる授業であった。

### (3) 附属中学校公開研究会の技術・家庭 家庭分野授業

中2年家庭科 題材名「アップサイクルで生活を豊かに！」 授業者 大竹 成美教諭
---

授業概要：本授業は、廃棄傘の生地を再利用した製作計画を立てる時間であった。子供たちは、傘生地のぬれに強い、防しわ性がある、乾きやすいなどの既習事項である繊維の特徴も踏まえながら、自分や家族にとって必要なものを考え、各自で製作計画を立てていた。

現場の先生方の困り感：中学校の製作題材では、衣服等の再利用についても触れることとされているが、具体的にどの程度触ればよいのか分からないと悩んでいる先生方は多い。また、製作題材についても、衣服等の手入れの内容であるスナップ付けとまつり縫いを製作に取り入れることで、製作物が限定されたり、想定以上の時間がかかってしまったりと、適切な製作題材を見いだせずに悩んでいる先生方も多い。

本授業のポイント：そのような中、大竹教諭は、大量に廃棄される現状にある傘に着目し、その傘生地を再利用した製作題材の授業を公開してくださった。再利用品で製作を行わなければならない訳ではないが、社会で起きている問題に目を向ける、再利用品を用いた製作を行える、製作時間は2単位時間程度（題材全体6時間計画）である題材構想を示してくださった。参観者からも、「これならできそう」、「この実践を取り入れてみたい」などと多くの声が聞かれた。また、生徒たちも、教師が提示した参考作品以外にも、実際の使用を想定しながら製作物のアイデアを出したり、その製作計画を立てたりしていた。生活を豊かにする布を用いた製作題材の構想と、廃棄傘生地の再利用方法が参考となる授業であった。

### (4) おわりに

附属小、中学校どちらの授業も、現場の先生方の悩みに寄り添い、具体的な解決方法の提示となる大変参考となる授業であった。今後はさらに附属学校園の先生方との連携を深め、よりよい授業づくり、授業改善の方策を検討、実施していきたい。また、1年間のFD活動に参加して、本紙面では報告できなかった学びも多くあった。今後もFD活動に参加し、知見を広げしていきたい。

### (1) はじめに

私は2025年4月に本学に着任した。それまで10年間、中学校・高校の教諭として勤務したが、そのほとんどの期間を東京都の私立中高一貫校で勤務した。その環境自体が日本全体の学校教育の中ではむしろ例外的な位置づけになるほか、他校種（幼稚園や小学校、特別支援学校）の実践に触れることはほとんどなかった。そのため、この1年間、教育研究の実験校・実証校として位置づけられてきた国立大学附属校の授業を見ることは非常に新鮮であり、新たな知見を得ることができた。本報告では著者が参加した3校の公開研究会の報告を行う。

### (2) 附属小学校公開研究会

1つ目に、5年生の道徳「自分の望む『自由』とは（善悪の判断、自律、自由と責任）」を参観した。前時に全児童が提出した「自由」についてのイメージを紹介し、「ルールにしばられない」「好きなことをできる」「迷惑をかけない」といった考えを共有うえて教科書を読み、話し合いに移った。哲学的なテーマであり、児童も当初は自らの考えをまとめることに苦戦している様子であったが、徐々に児童らが整理した内容を言語化し、話し合いが活発化した点が印象的であった。

2つ目に、6年生の社会「聖徳太子、中大兄皇子、聖武天皇の国づくり」を参観した。厳密な「自由進度学習」とは異なるだろうが、前時から継続して調べ学習にウェイトを置いた授業展開で、各児童は資料集を使うのか、タブレットを使うのかなど、依拠する資料を自由に選択していたり、あるいはグループを作って調べたり個人で作業を進めたりと、「誰と取り組むか」も様々であった。しかし、調べ学習のヒントになる資料を様々に用意したり、巡視を通してそれぞれの進捗状況に合わせて次の問いを出したりと、教員主導のしかけを様々に展開していたことで、密度の濃い学習になっていた。その前提として、授業者側が豊富な専門的知識を有していることも分かり、周到に練られた授業であることが伝わってきた。

### (3) 附属中学校公開研究会

2年生の社会（地理的分野）「中部地方」の単元のまとめにあたる授業を参観した。冒頭では、これまでの授業で出された生徒の意見等を振り返り、そのうえで「各自が調べたりないこと」に焦点を当てた。このような個人の探究活動の後、クラス内で自由に交流を行った。担当教員が授業冒頭で触れていた通り、「中部地方とはどのような特色のある地域か」という非常に大きな問いが提示されたため、授業前半では思うように作業が進まない生徒も見受けられたが、交流を通して各生徒は単元を振り返り、自分なりに中部地方の特色を言語化できていた。より広い意見に触れるために予め教員がグループを指定し、ジグソー法等を用いるなど、話し合い活動はさらなる発展性・応用可能性を秘めている授業という感想を持った。

#### (4) 附属特別支援学校公開研究会

高等部の生活単元学習「計画的にお金を使おう」を参観した。事前に各生徒に対し、「どのような状況だったらどれくらい幸せである／ないか」の意見を出してもらったようで、前時までの振り返りでは、どの生徒からどういった意見が出たかを的確に振り返り、展開につなげていた。この際、生徒の不規則発言を上手く回収しつつ次の展開につなげており、状況に合わせた各先生方の臨機応変の対応が非常に素晴らしかった。そのうえで、生徒の意見を基に、すぐろくのような形でイベントを発生させ、各イベントに対し「幸せポイント」が下がらないように各自が買い物や貯金をしてお金の使い方を学ぶというのが本時の要点であった。タブレットを活用した模擬 ATM など、教材も非常に手の込んだものであったほか、家計簿をつける等、授業内容も実生活に即したもので、他校種の授業にも援用できる点が多く含まれていた。また、生徒が買い物や銀行で戸惑っていると、すかさず先生方が「お金引き出すんじゃないか？」等とフォローするなど、一人ひとりの生徒を丁寧に見ている点も、授業秩序の維持や内容の定着という意味で非常に参考になるものだった。特別支援教育の授業を1時間通して参観したのは初めてであったが、丁寧な授業準備・授業実践から大きな刺激を受けた。

#### (5) 総合考察・まとめ

附属学校の児童生徒や学級は、一般の公立学校と同列に語れない点は否定できないだろう。そのため、附属学校の授業を「そのまま」他校に持ち込むことはできないかもしれない。一方で、公開研究会やそれ以外の場面で附属学校の先生方から感じるのは、質の高い実践へのこだわりと向上心である。つまり、児童生徒を丁寧に見取り、授業を修正する力を日々高めているのであり、それゆえ、異なる状況に置かれればその状況に合わせた授業を計画し児童生徒を引きつけるのだらうと感じた。附属学校の意義の1つに、先進的な教育を実践・提示することが指摘されてきたが、それ以上に、こうした「学び続ける教師」の姿を教員志望の学生や県内の教員に伝えていることの意義・重要性を実感する1年間であった。教員養成系学部に所属する一員として、来年度以降、微力ながら附属学校の実践に少しでも貢献できればと考えている。

## 1 年間を振り返って 教育実践センター 佐々木英男

### 1 はじめに

私は、群馬県内の公立の小中学校、館林市教育委員会、群馬県教育委員会東部教育事務所で勤務し、令和7年4月に、群馬大学と群馬県教育委員会の人事交流により就任した。これまでも、出会った子供たちや共に働いた先生方から、多くのことを学び、現在の自分自身を成長させることができたと感じる。特に、上越教育大学大学院で2年間、数学教育についてじっくりと研究する時間をいただくことができた経験は、今になってもとても大きなものとなっている。この立場になり、教職大学院の院生とともに学ぶ中で、これまでの経験を伝えるとともに、自分自身の成長にもつなげていきたいと考えている。本年度、FD活動に参加させていただき、新たな知見を得たり、自身の教育活動を見直したりすることができた。そのことについて、以下に報告したい。

### 2 附属中学校公開研究会に参加して

附属中学校の公開研究会において、未来創造科の授業を参観した。1年生はまとめの発表であったが、1学期にアドバイザーとして中間検討会にも参加していたため、多くの生徒が発表内容や発表の仕方に改善が見られ、充実した発表会となっていた。その中で私自身一番驚いたことは、各ブースに招待されたアドバイザーの方のレベルの高さである。自分が参加した時も、あらかじめ資料をいただき、事前に目を通して気づいたことや改善点を伝えたが、さらに、独自の視点で調べた内容を生徒に伝えたり、それぞれの立場の視点から具体的に分かりやすくアドバイスしたりと、生徒にとってはとてもありがたい時間であったと感じた。こういった体制作りも、附属中学校における未来創造科の成果につながっていると改めて実感した。

2年生は沼田中学校の生徒とオンラインでつながり交流していた。それぞれの視点で、良い点や改善点を伝えあっており、オンラインであっても活発な意見交流が行われていた。その中で、沼田中学校の生徒から、附属中学校の生徒にアドバイスを求める場面があった。若干難しい視点でアドバイスを求めたように感じたが、附属中の生徒は、「少し時間をください。」と断ったうえで、グループのメンバーで話し合いながらアイデアを出し合い、「お待たせしました。」と、アドバイスを返していた。その場で思いついたことを何となく返すのではなく、しっかりと練り合っている姿に感動した。また、オンラインにより、離れた中学校の生徒であっても、活発に意見交流できる環境が整っており、今後、県内の様々な学校と附属中学校がつながって交流を深めていけると、未来創造科を中心とした、附属中学校の実践が公立中学校にも波及していく可能性を感じることができた。

### 3 附属特別支援学校公開研究会に参加して

附属特別支援学校の公開研究会では、小学部体育、中学部数学、高等部美術を参観した。同じ教室に複数の知的レベルの児童生徒がいる中で、一斉授業を進めていくことの困難さを改めて感じた。個に応じた支援が必要となる中で、生徒に対する教員数が少なく、手厚く支援するための工夫が必要であると感じた。しかしそのような中でも、附属特支の先生方は、教材や教具の工夫、環境設定の工夫など、細かな支援を充実させており、また役割分担もしっかりとなされており、たいへん勉強になった。自分自身が関わってきた学校では、特別支援学級の担当は、臨時任用の教員が当たることが多く、当然、特別支援教育の専門的な知識が乏しい中で、十分な支援が行われていない状況も見てきた。公立学校においても、専門的な知識をもった教員が多くなり、特別支援教育の充実が図れる体制にしていくことが重要である。

### 4 おわりに

私が現場を離れて7年が過ぎようとしている。この間、新型コロナウイルス感染拡大による休校や、一人一台端末の整備など、学校現場の改革が目まぐるしく進んできている。その中で、一番失われてしまったものは、コミュニケーション力だと感じている。コロナにより、会話や活動が制限されたり、オンラインでつながることが多くなったりしたことで、コミュニケーションの仕方を学ぶことができなかった子供たちが、今まさに高校生、そして大学生になっている。本学においても、教員を目指すべく集まっている学生たちではあるが、そのような感覚を覚えてしまう場面もある。制限がなくなった今、改めて円滑なコミュニケーションが図れる学生になってほしいと考える。児童生徒だけではなく、同僚の教員、保護者、地域の人たちとコミュニケーションをとることで、自分自身の信頼にもつながると考える。

本学で教員を養成する業務は、子供たちの幸せに繋がるやりがいのある業務である。任期の間、精一杯務めたいと考える。教員の魅力、楽しさ、それと同時に困難さもしっかりと伝えていきたい。困難さはあっても、それでも、教員という職業は魅力があるということをこれまでの経験から多くの学生に伝えていきたいと考えている。

## 附属学校園の連携強化と教育研究の深化への知見 附属小学校 校長 足達 哲也

### (1) はじめに

私は本年度、大学の機構改革に伴い、県内公立学校の管理職として初めて附属小学校長に赴任した。これまで大学教授が務めていた職を公立学校の管理職が担うという新たな体制下での着任であったが、私自身は過去に教諭として本校に勤務した経験があり、附属学校の組織文化や教育活動の特性については承知している。一方でそれは、一教諭としての視点であり、木を見て森を見ずの状態であった。本研修を一つの契機として、大学との連携、附属学校園相互の関係性等について、管理職としての視座から捉える機会を得たことで、大きな学びがあった。本校には、教育実習を通して教員養成に資すること、先進的な教育研究の推進、及びその成果を県内外の公立学校へ公表し還元するという重要な使命がある。本報告では、FD研修等の機会を通じて得た知見と、本年度の取組の成果について述べる。

### (2) 公開研究会の成果と非認知能力の育成

本年度の公開研究会では、12の教科等において6学年19授業を公開し、県内外から700名を超える参加者を得て大きな成果をあげた。本校では、研究主題「共によりよい生活を創造する子ども」を掲げた3年次の研究に取り組んでおり、全校体制で「非認知能力」を視点とした学びのデザインを追求してきた。

特に本年度は、副主題として「非認知能力『自信』を深める学びのデザイン」を設定した。子どもたちが自らの学びを振り返り、他者との協働を通じて自己の変容を実感し、「自信」を深めていく姿を、実際の授業と後の授業研究会において公表した。非認知能力は「見えない力」ではあるが、それを評価の指標（行動指標）として可視化し、授業設計に組み込むことの重要性について、多くの参観者と議論を深めることができた。

その後に参加したFD研修の中では、本校公開研究会にご参加いただいた大学教員からの外部評価を得たり、ディスカッションしたりする中で、改めて、公開研究会の意義や課題を捉え直すことができ、有意義であった。

### (3) 附属四校園の連携と学びの接続・一貫性

昨年度設置された「附属学校部」の組織員として、幼稚園、中学校、特別支援学校の各校園長と緊密に連携を強化している中、FD研修の一環として、他の三校園の公開研究会にも全て参加した。さらに附属学校部独自で「相互授業参観」を行っており、それらの機会を通じて、以下の知見を得た。

- ・ **幼小中の縦の連携と接続の担保**： 幼児教育から小学校、中学校へと至る学びの一貫性を確保するための具体的なヒントを得た。小学校は、幼児教育と中学校教育を繋ぐ中核的な役割を担っている。この視点に基づき、以下の二つの具体的な方策を講じる原動力となっ

た。① 幼稚園・小学校の接続を意識した「スタートカリキュラム」の抜本的見直し ② 小学校・中学校の一層の接続強化を目指した「総合的な学習の時間」のあり方検討

- ・**特別支援教育からの示唆**：校舎を一つにしている附属特別支援学校の公開研究会からは、多様性や包摂性、及び学びのユニバーサル化への知見を得た。生徒の表出から思いや考えをみとる姿勢は、小学校における非認知能力の育成にも不可欠な視点である。また、教科の内容を通して学ぶことの意味や意義を問い直すことにつながった。人が学ぶことの意味や意義を、生きて働く力の育成として捉えようとするれば、非認知能力を含め、汎用的な資質・能力の育成は重要かつ普遍的なテーマであると同時に、日々授業づくりに向き合う中では日常的である。俯瞰して教育について捉え、ブラさずに授業として具体化することに向け、教員としての幹をしっかりとつくっていく研修の重要性にも思いが至った。
- ・**共通テーマの設定**：上述のように、管理職の視点から、また大学の附属機関としての意味を確認した上で、附属学校園の授業を参観することで、非認知能力を重視するという四校園共通の理念を再確認した。これは、附属四校園で目指す授業研究の方向性を示す「共通テーマ」の設定に向けた協議を前進させることにつながった。

#### （４）共同教育学部との連携および理論的支柱

附属機関としてのこれらの取組は、本学共同教育学部における各講座の教員の皆様との連携に支えられている。具体的な研究協力や共同研究を通じて、学校現場の実践に専門的な知見が加えられ、理論と実践の両輪による研究深化が実現している。

特に、新任教員 FD 研修会等の機会を通じ、大学の教育理念や教員養成の仕組みについて理解を深められたことは、附属小学校の使命を再認識する上で極めて有意義であった。

#### （５）成果と次年度に向けて

以上を踏まえ、本年度の活動を通じて得た成果を総括する。

- ・公立学校管理職としての視点と附属での教諭経験を融合させ、学部・附属間の架け橋としての役割を果たすことができた。
- ・非認知能力を核とした研究公表により、県内教育界への貢献を果たすことができた。さらに、本 FD 研修を通じてその意義や課題を客観視できた。
- ・四校園連携による全体構想の具体化に向け、接続期カリキュラムの改善に着手できた。

次年度は、これらの成果を基盤とし、ICT 環境（教育 DX）の活用やインクルーシブな教育環境の整備をさらに推進するとともに、共同教育学部との共同研究を一層深化させ、附属学校としての先導的な教育モデルを構築していきたい。

## 活動報告 附属中学校長 栗本郁夫

### 1 はじめに

私は、令和7年4月から附属中学校長として勤務し、附属中学校の学校経営に携わるとともに、附属学校部の副部長として、附属学校全体の運営及び連絡調整等に関わっている。令和7年3月までは、群馬県教育委員会に勤務し、第四期群馬県教育振興基本計画（群馬県教育ビジョン）の作成や周知等に力を入れてきたが、附属学校に勤務し、群馬大学共同教育学部の理念を踏まえ、群馬県教育ビジョンの学校現場での実現に向け、関係の先生方とともに様々な実践に挑戦できていることは幸せであると感じている。群馬県教育ビジョンはもとより、OECDのラーニングコンパス2030や国の様々な施策の方向を踏まえると、現在の教育においては、いかに児童生徒がエージェンシーを発揮し主体的に学びを進め自律できるようにするかが課題であり、この点について大学と連携しながら附属四校園で協働しながら取り組んでいる。このFD研修においてもそうして視点を中心に1年間活動に取り組んだ。

### 2 附属学校部の概要、附属中学校の研究について

FD研修の第2回は附属中学校で行われ、附属学校部の概要と附属中学校の研究について、研究主任とともに説明した。主な内容は次のとおりである。

- 附属学校園の役割について（未来を創る人材を育成する地域の教育モデル校）
- 群馬大学共同教育学部附属学校園の特徴（群馬県教育委員会との連携の充実等）
- 附属学校部の設置と組織、運営体制について
- 附属学校部としての具体的な取組について（県教委非認知能力の評価育成事業協力校、探究・英語教育・インクルーシブ教育・新制服PJ等のWG等）
- 附属中学校の研究の概要

附属学校部は、大学と附属学校園の縦の繋がりの強化と、附属学校園の教育活動の一体的推進といった横の連携の充実を目指して令和6年度に設置された。令和7年度には、全ての学校園で校園長の常勤化、教頭の設置（副校長職は廃止）がなされ、部長、副部長、副事務長職も含め、組織体制も確立され本格的に始動となった。この組織体制は、全国的に見ても先進的な事例であり、大学との連携を深めながらこれからの社会を見据えた先駆的な教育活動を推進するとともに、いじめをはじめとする生徒指導や様々な危機管理の問題等にも迅速かつ適切に対応することが期待されている。今年度は、月1度の附属学校部会議（四校園の校園長出席）で共通認識を図るとともに、四つのWGの実施、四校園の研究主題の統一に向けた協議の実施、様々な学校経営に関わる情報共有と相談等を行い、四校園で足並みを揃えた取組ができている。FD研修で、附属学校部のこのような新たな取組を報告したことで、大学教員との共通認識や今後の連携につなげることができた。

### 3 附属小学校・附属特別支援学校・附属幼稚園公開研に参加して

#### (1) 附属小学校

○研究主題「共によりよい生活を創造する子どもの育成～非認知能力『自信』を深める学びのデザイン～」は、非認知能力と認知能力を相乗的に高める実践であり、幼稚園も含めて12年間で研究を進めることが改めて重要であることを認識した。

○公開授業では、社会科において児童が自分の調べたことに自信をもって発表したり交流したりする姿が見られ、探究意欲の高まりを感じられた。音楽科においては、身体表現を工夫して取り入れたことで自然に曲想の変化や特徴を実感することができ、非認知能力と認知能力を連動させて高めるような実践を見ることができ、大変参考になった。

○教育講演会では、京都大学 石井英真准教授による「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をどうとらえるか」を演題とした講演が行われ、学校現場の実態を踏まえ、これからの教育のポイントを知る貴重な機会となった。

## (2) 附属特別支援学校

○研究主題「自分の思いや考えをもち、社会とかかわる児童の育成～子どもが願いの実現に向かう中で、思いや考えを巡らせる授業実践～」は、小中学校でも取り組んでいるエージェンシーの発揮とコンピテンシーの向上を通して自ら課題解決を図る学びと同じであり、研究の方向が一致していることを改めて確認できた。

○公開授業では、優れた教材の作成・準備や児童生徒が興味関心を持てるような環境の工夫が見られるとともに、児童生徒自身が自ら進んで学びや作業に取り組めるよう、できる限り教師が手を出さずに見守り、タイムリーに助言をする姿が見られ、非認知能力を育む上で大変参考になる取組であった。

## (3) 附属幼稚園

○研究主題「あきらめないで、やり遂げる幼児の姿を育む保育～「必要な力」を培うための環境の工夫～」は、主体性や粘り強さに視点をあてたものであり、現代の子どもたちに必要な非認知能力に視点を当てたものであると感じた。

○パネルディスカッションでは、「非認知能力を育み、『つながる学び』で未来を開く」をテーマに、附属各校園の研究主任、アドバイザーが登壇し、幼小中一貫の非認知能力の育成について議論でき大変参考になった。特に、幼稚園で育んだ主体性を小中学校でどう伸ばしていくかが課題であり、幼小中接続の充実に向け大変参考になった。

## 4 おわりに

今年度、FD研修として、大学の先生方と情報共有をしたり、附属学校園の公開研究会に参加したりしたことで、それぞれの連携を深めることができたとともに、これからの教育の方向を見据えた取組をより一層進めることができるようになったと考える。今、附属学校園は一体となって、未来に向けてスタートを切ったところであり、今後の活動の充実は、附属学校園内部での一体的な活動の推進や、大学、共同教育学部の先生方の知見を生かした教育活動の展開、県教委や国との一層の連携に懸かっており、今回のFD研修でそれを確認することができ、大変有効であった。

## 1 年間を振り返って 附属特別支援学校 城田謙司

### 1 はじめに

私は、県内公立学校での11年間の勤務、附属特別支援学校での9年間の勤務を経て、その後11年間の教育行政職および学校管理職を経験し、本年度より附属特別支援学校長として着任した。着任にあたり、私は附属学校の使命である「教員養成の質の向上(教育実習の充実)」、「次代を見据えた先進的・先導的な理論と実践に基づく教育研究・実践」、「研究校・モデル校としての研究成果の発信(地域貢献)」等といった、附属学校の使命と役割について、いかに推進し、充実させていくべきかという点に大きな職責と不安を感じていた。以下、今年度参加した今年度参加したFD研修等を通して得た知見と、今後の展望について報告する)

### 2 研修に参加して

#### ① 第1回新任教員FD研修

本研修を通じ、教員養成FD活動推進委員会の位置付けや目的について理解を深めることができた。大学教員と同じ場で、教員養成に携わる者としての目的や役割を共有し、共に指導能力の向上を目指すことの意義を再確認する機会となった。特に、附属学校が教員養成のフィールドとして十分に機能するためには、大学教員との緊密な連携が不可欠であることを改めて認識した。

#### ② 附属小学校公開研究会

「共によりよい生活を創造する子どもの育成～非認知能力「自信」を深める学びのデザイン～」を主題とし、各教科等の本質的な学びにおける、非認知能力の「自信」を深める学びの在り方についてについて研鑽を積んだ。知的障害教育においても、非認知能力は学力や自己実現の土台として極めて重要である。特に、知的障害教育では、その障害特性から、教科指導に加え、複数の教科等の目標・内容を、実際の生活に関連する単元活動(生活単元学習、作業学習、日常生活の指導など)において、総合的・実体験的に学ぶことが有効とされ、主体的・実体験的な学びを展開してきている。子どもの生活の文脈に合わせた指導により、その学びを主体的な学びとしていくことで、協調性や好奇心、粘り強さといった非認知能力の育成を図ってきている。

公開授業(1年生活科「かみヒコーキけんきゅうじょ」)において、児童が「遠くに飛ばしたい」「高く跳ぶかみヒコーキを作りたい」との思いを持ち続け、試行錯誤したり、友だちと友人と協力したりしながら遊びを深める姿は、知的障害教育における「合わせた指導」との高い親和性を感じさせるものであり、指導の在り方を再考する貴重な視点を得た。

#### ③ 附属中学校公開授業

「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成～エージェンシーを発揮し、生徒自身がデザインした探究的な学びを通して～」を主題とし、課題解決を目指して、見通し・行動・振り返りを行いながら、生徒が自分の学びをデザインしながら探究に焦点を当てた授業を参観した。3年生の「未来創造科」では、生徒が専門家のアドバイザー

一に対して自らの探究成果を提案し、助言や励ましをもらい、自身の探究を深めようとする取組が行われた。アドバイザーからの助言を得る際、生徒はアドバイザーの助言に深く注意を向け、助言に対し自らの考えとの違いや新たな気づきを伝えたり、助言を自分の言葉で置き換えたりするなど、対話を通じて思考を深める姿が印象的であった。課題が自分事となっていること、自身の課題について深く考えられていることが伺えた。対話により、学びを深める姿を見ることができた。課題を「自分事」として捉え、専門的な知見に触れることで新たな問いを生じさせるプロセスは、学習の本質を突くものであった。アドバイザーが専門的な知識や技術をもった人材であったことは、単に専門性の高さだけでなく、生徒が課題の本質に迫るための気づきや、新たな問いを生じさせる上で有効であること等、専門家との連携が、生徒の気づきを深化させる上で極めて有効であることを再確認した。

### ③ 附属特別支援学校公開授業

本校では、昨年度より「自分の思いや考えをもち、社会とかかわる児童生徒の育成」を研究主題に掲げ、子ども達が主体的・積極的に社会参加できるよう、自らの思いや考えをもち、決定し、行動できる児童生徒の育成を目指してきている。児童生徒が、“〇〇したい”“〇〇になりたい”と「願い」をもち、「考え」を巡らせながら学習活動に主体的に取り組めるよう以下の視点からの工夫を行い、授業づくりを行ってきている。

子どもが「願い」の実現に向かう活動の工夫	子どもが思いや考えを巡らせるための支援の工夫
<ul style="list-style-type: none"> <li>・得意なことを生かせる／子どもが“できそう”と思える活動</li> <li>・発展性のある／ストーリー性のある活動</li> <li>・現在の力を知る／試す場面</li> <li>・「願い」の実現のためにできるようになりたいことを、子ども自身が捉える場面</li> <li>・自己決定する場面</li> <li>・繰り返し試せる場面</li> <li>・改善する場面</li> <li>・友達の前で発表する場面</li> <li>・他者の思いや考えに触れる場面</li> <li>・これまでとこれからをつなぐ振り返りの工夫 (どこまでできたか、なぜできたか、次はどうするか)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境構成の工夫 見通しをもてる／やるのが分かる “やってみたい”と思える 友達と一緒に取り組める／友達の様子が見える 一人でできる／繰り返し試せる “うまくいった”と実感できる</li> <li>・複数の選択肢を用意しておく</li> <li>・目標ボードやチェックリストなどの活用</li> <li>・かかわり方の工夫 一緒に取り組む 待つ／見守る 言語化してフィードバックする</li> <li>・疑問や問題意識につながる発問</li> </ul>

#### ◆子どもが思いや考えを巡らせるための活動や支援の工夫

### 3 おわりに

附属学校園においては、公開研究会のみならず、日常的に学部の先生方から専門的な助言をいただき、共に授業を創り上げる環境がある。この協働体制こそが、教育実習を指導する本校教員の専門性向上、ひいては学部における教員養成の質的向上に直結している。

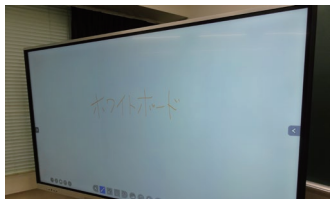
また、大学教員との共同研究の成果を実践の姿として地域に発信することで、地域の特別支援教育への貢献につながっている実感をもつことができた。今後も大学との連携・協働を一層推進し、附属学校としての使命を果たしていきたい。

# (前置き) ELMOBoardは、超大型ディスプレイを搭載したタブレット端末である。

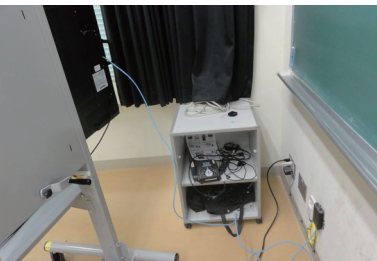
## A10 保管 ELMO Board (8インチ) の活用方法

- ①ELMOBoardの機能
- ②「書画カメラ」とELMOBoard (HDMI接続)
- ③「PC」とELMOBoard (HDMI接続 & USB接続)
- ④「書画カメラ」と「PC」(USB接続) → 「PC」とELMOBoard (HDMI接続)
- ⑤ (番外) ホワイトボード機能を有するMicrosoft社の「OneNote」とTEAMSの「Whiteboard」

### ①ELMOBoardの機能



【ホワイトボード】



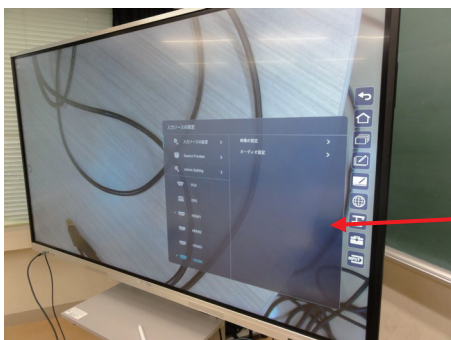
有線LAN接続すれば、インターネット検索可



【トップ画面】



映し出しているPCの画面に透明なシートをかぶせ、油性ペンで書いている感じです。かなり使える機能です。



直前の操作に戻る



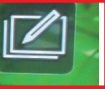
トップ画面に戻る



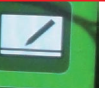
起動しているタスク一覧



画面に直接書き込む



ホワイトボード起動



インターネット検索



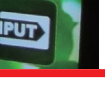
USBカメラを接続する



設定

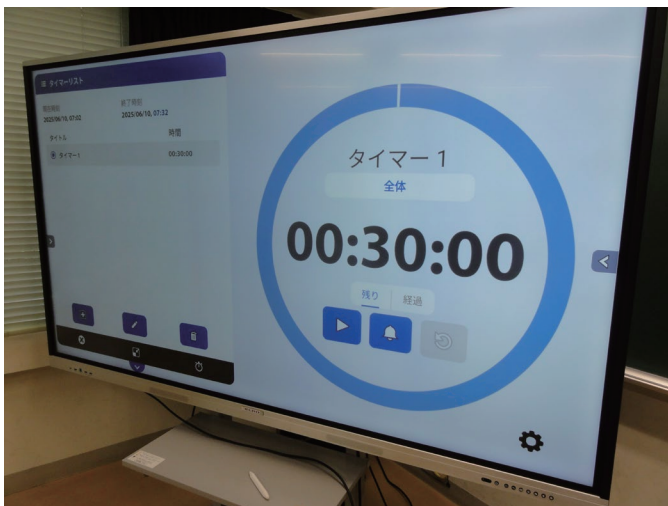


入力端子を切り替える

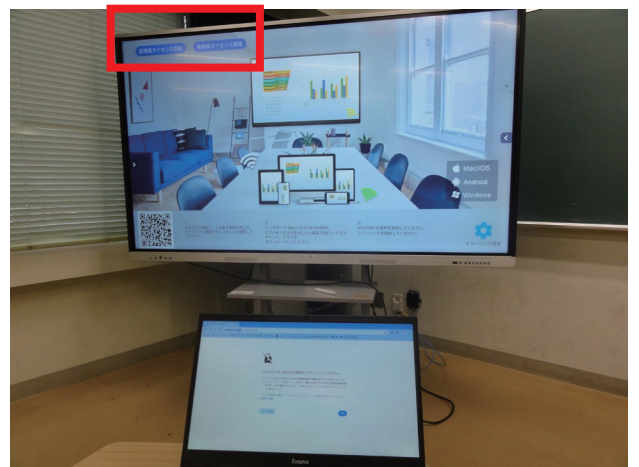




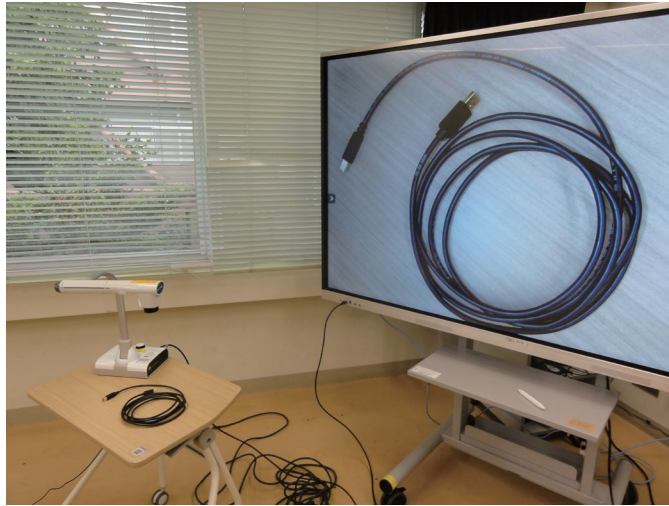
インストールされているアプリ一覧



※「タイマー」以外のアプリは、多々ありますが、試用版であったり、ネットワーク設定が必要であったり、現時点、活用できません。



## ② 「書画カメラ」とELMOBoard (HDMI接続)



ディスプレイ左下に「HDMI1」、ディスプレイ左側面に「HDMI2」「HDMI3」「HDMI4」とあります。「書画カメラ」、「ノートPC」、「ビデオカメラ」、「スマホ」など、切り替えて使用することができます。

## ③ 「PC」とELMOBoard (HDMI接続&USB接続)



画面左下のHDMI1に「HDMI」と「USB3.0」を接続



USB3.0を接続することで、大型ディスプレイがタッチパネルとなり、接続されているPCを直接操作することができます。例えば、パワポのスライドショーなど、大型ディスプレイをクリックすれば、次に進みます。

## ④ 「書画カメラ」と「PC」 (USB接続) → 「PC」とELMOBoard (HDMI接続)

前述した②と③は、HDMIの入力切り替えが必要となります。今回の方法を使えば、その切り替えはなくなります。

さらに、WEBアプリケーション「Image Mate + C」 (インストール必要なし) を利用すれば、簡単なペイント機能を使えます。

<https://www.elmo.co.jp/product/software/image-mate-c/>



ホワイトボードと書画カメラを切り替えて利用できる。  
さらにリアルタイムで、書画カメラ<sup>A2</sup>の画像に書き込みができる

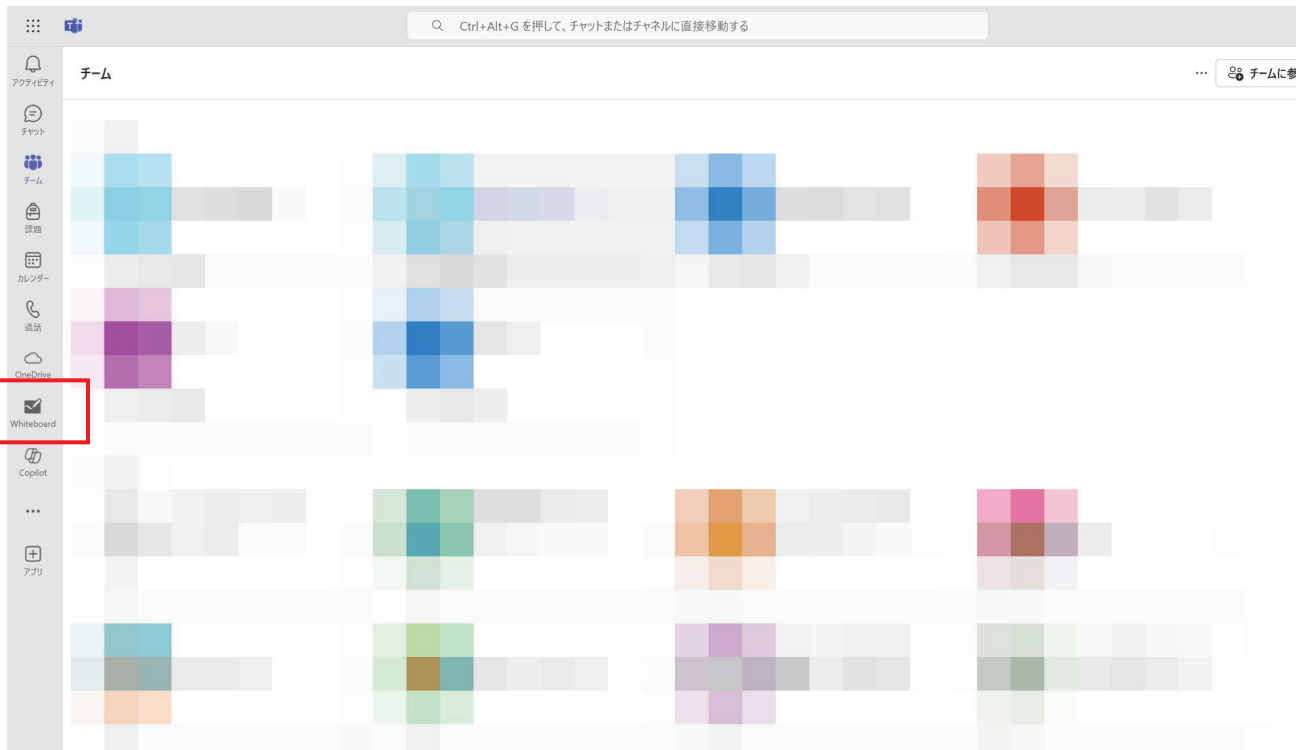
## (番外編) ⑤ ホワイトボード機能を有するアプリ

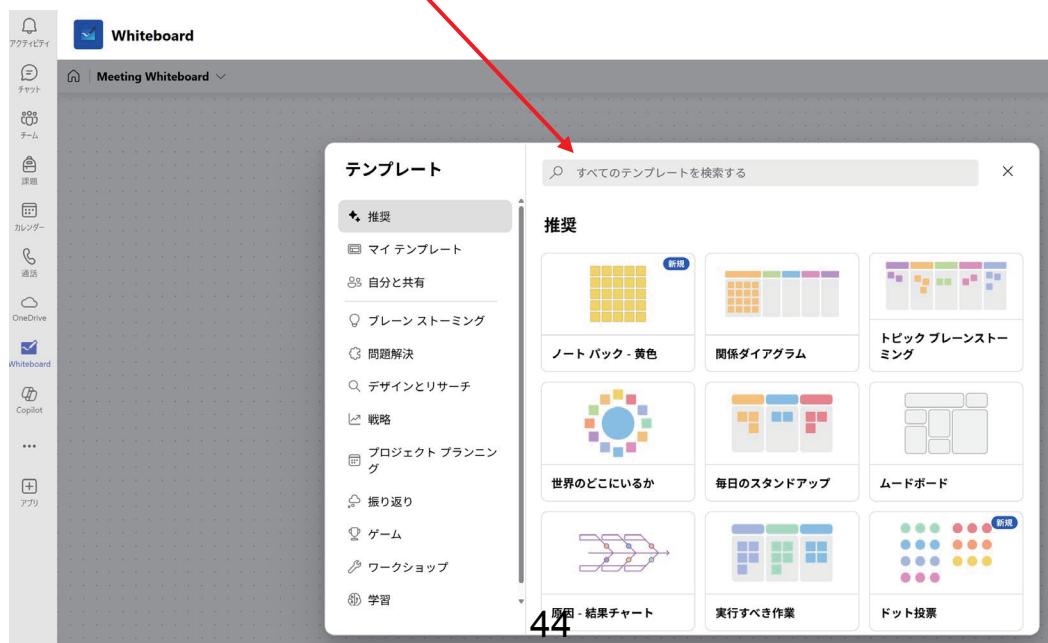
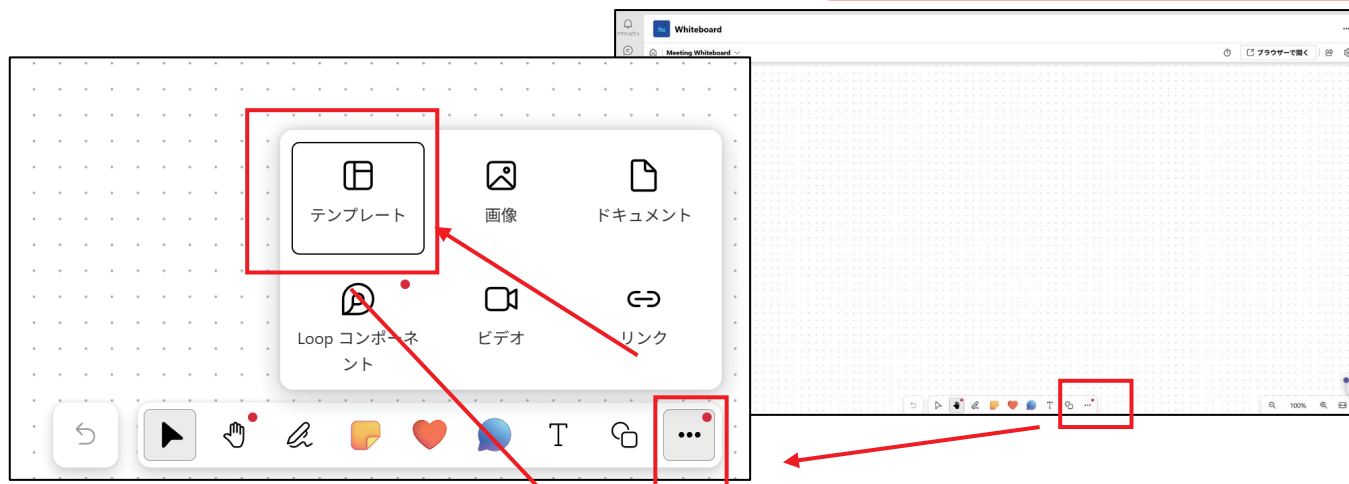
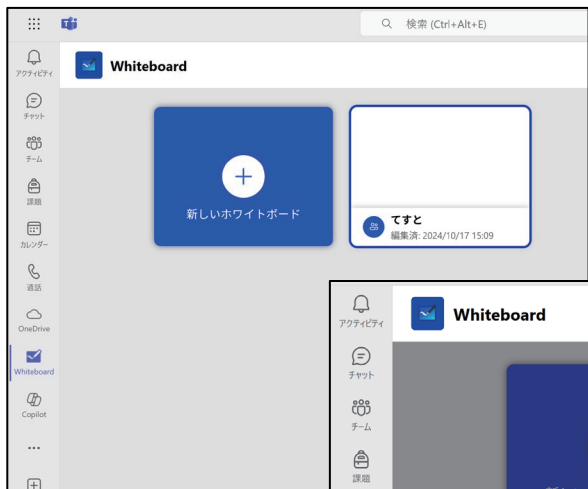
- 1 Microsoft社のOneNote
- 2 Microsoft社のTEAMSから「Whiteboard」を起動

### 1 OneNote



### 2 TEAMSから「Whiteboard」



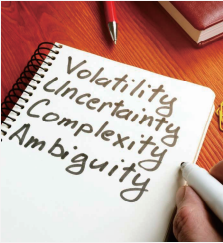




# 実現したい未来に向けて 責任をもって挑戦する ことができる生徒の育成

## 1. 主題決定の経緯

### 社会の変化



- 2030年代「よりVUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代」
- メガトレンド
  - 社会の変化（移民、紛争など）
  - 経済の変化（AI、オートメーション化など）
  - 個人レベルの変化（家族形態、健康状態など）

変化に対する、ある程度正しい予測をただ受け入れるだけではなく  
自ら「未来を創る」力が求められる

求められて  
いる教育

1 OECD  
ラーニング  
コンパス  
2030

2 文科省  
教育振興基本計画

3 群馬県  
教育ビジョン

1 OECD  
ラーニング  
コンパス  
2030

学習の本源的価値

求められて  
いる教育

個人及び社会全体の  
2030年における

ウェル  
ビーイング

変革をもたらす  
コンピテンシー

- ・新たな価値を創造する力
- ・責任ある行動をとる力
- ・対立やジレンマに対処する力

エージェンシー

「誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動することである。形作られるのを待つよりも自分で形作ることである。誰かが決めたり選んだことを受け入れるよりも、自分で決定したり、選択することである。」

AARサイクル

- ・見直し (Anticipation)
- ・行動 (Action)
- ・振り返り (Reflection)

2 文科省  
教育振興基本計画

2040年以降の社会を見据えた  
持続可能な社会の創り手の育成

日本社会に根差した  
ウェルビーイングの向上

求められて  
いる教育

イノベーション  
を担う人材育成

- ・新たな価値を創造する力
- ・責任ある行動をとる力
- ・対立やジレンマに対処する力

主体的に社会の  
形成に参画する  
態度の育成

「自分で行動することである。自分で形作ることである。自分で決定したり、選択することである。」

# 3 群馬県教育ビジョン

第4期 群馬県教育振興基本計画  
群馬県教育ビジョン  
計画期間：2024年4月～2029年3月

**最上位目標** 自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて  
一ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける「自律した学習者」の育成

「学ぶ」って楽しい  
試行錯誤しよう、失敗してもいいのだと知ろう。それが自分を強くしてくれるよ。

頑張ってもいいし、負けを覚めてもいいんだよ

求められている教育

# 求められている教育

1 OECD ラーニング コンパス 2030

2 文科省 教育振興基本計画

3 群馬県 教育ビジョン

ウェルビーイングの向上のため  
新たな価値を創造する力（イノベーション）  
主体的に社会形成  
エージェンシー

二年前の研究の

# 成果

「主体的・対話的で深い学びの実現」  
「現代的な諸課題に対する解決意欲の向上」

「自分で国や社会を変えられる」  
「日本の将来が良くなる」と考えている生徒

「学校や家庭、塾などの学びが  
日本や世界の将来につながる」という意識

自分の学びに責任をもつ  
学びを自分事にし挑戦できる

少 課

本校生徒の実態から

**目標** 共生 心豊かに互いを生かす  
創造 知性を高め未来を創る  
健康 たくましい心と体に育ち合う

解決すると…

**課題** 自分の学びに責任をもつ  
学びを自分事にし挑戦できる

解決するには…

**仮説** 各教科や未来創造科を通して、  
生徒がエージェンシーを発揮しAARサイクルを回す  
探究的な学びを実践していくことが有効だろう。

# 01 実現したい未来

自らの可能性を発揮した幸福な人生と、よりよい社会

**幸福な人生**  
・やりたいことができます  
・自分の可能性を発揮している  
→自己の生き方に関する課題の解決

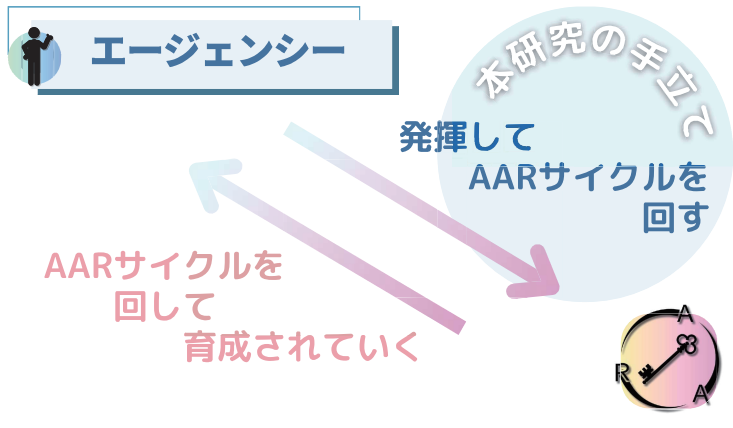
**よりよい社会**  
・平和・差別のない  
・経済的に豊か など  
→現代的な諸課題の解決

# エージェンシー

## OECD Education2030

「生まれながらにして変えられない性格や性質ではなく、学習することができるものであるし、変えることができるものである」

AARサイクル：「発達の基盤の構築にもつながるし、変革をもたらすコンピテンシーやエージェンシーのような、より発展的なコンピテンシーの育成にも寄与する」



### 04 探究的な学び

教師の支援に基づく学習活動の割合

生徒自身の力で学べるように

「一連の過程」を生徒自らデザイン

探究的な学びの一連の過程

生徒のデザインに基づく学習活動の割合

卒業まで社会へ

## 3. 具体的な手立て

### 課題の明確化

- 課題が、探究的な学びに向かうために必要な要素を備えているか
- 教科の特性を踏まえた必要なサイズであるか
- 各教科の良質な課題について、教師と生徒が明確な共通認識をもつ

音楽	①「旅立もの日に」の合唱で、②卒業式のラストを忘れられないものにするためには、③歌詞と音楽（強弱・音の重なり・構成など）をどのように関わらせて工夫すればよいだろうか④。	【課題のサイズ：題材】 ①音楽活動の場や、曲名・ジャンル名 ②音楽表現や鑑賞で生み出したい、この場の価値 ③（表現）分野に応じた活動（要素を含む） ④疑問形 ⑤（鑑賞）要素＋行動目標
英語	①海外に住む、日本の伝統行事に興味があるALTのお母さんに、③日本のお正月の過ごし方についてよく知ってもらえるように、④内容のまとまりを意識しながら手紙を②書く。	【課題のサイズ：単元】 ①英語を使う（コミュニケーションを図る）必然性のある目的や場面、状況等がある。 ②活動目標（～しよう）である。 ③3つの話題を踏まえている。 ④5領域（聞く、読む、話す[やり取り、発表]、書く）を踏まえている。

### 各教科等の手立て

- 1 生徒が自ら課題を設定できるようにするための手立て
- 2 エージェンシーを発揮してAARサイクルを回すための手立て

### 各教科等の手立て

1 生徒が自ら課題を設定できるようにするための手立て

#### 探究VIパターン

① 2つの関係を探究する ・風の強さと車の進む距離にはどんな関係があるか？ ・その日の天気と気温にはどんな関係があるか？	④ 「方法」を探究する ・どうしたら砂と水を分けられるか？ ・物を多く溶かすにはどうすればよいか？
② 変化する要因を探究する ・電磁石の強さは何によって決まるか？ ・なぜ月の形が変わって見えるのか。	⑤ 性質やつくりを探究する ・血液にはどんな特徴があるだろうか？ ・水は植物のどこを流しているのだろうか？
③ 事象の変化を探究する ・金属球を加熱すると、体積はどうなるか？ ・支点から距離を遠ざけると、力の大きさはどうなっていくか？	⑥ 共通点や相違点を探究する ・動物と植物にはどんな違いがあるだろうか？ ・水溶液の共通点は何だろうか？

※哲学的な「なぜ？」は探究できない！  
例 なぜ人間は存在するのだろうか。  
なぜ宇宙が生まれたのだろうか。

#### 理科の手立て

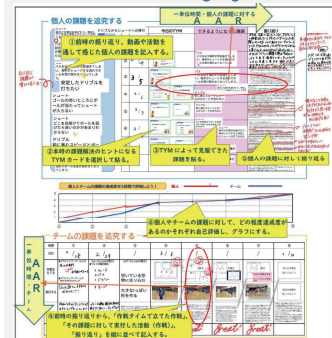
- 探究VIパターンの作成と活用
- これまで探究してきた課題を類型化
- 「なに」を探究することで疑問が解消できるかを考える
- 課題を自ら設定する力を育成する。

## 各教科等の手立て

### 2 エージェンシーを発揮して AARサイクルを回すための手立て

#### 保健体育科の手立て

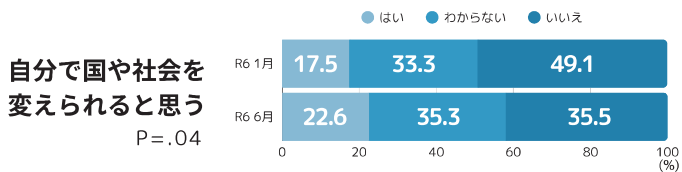
- OPP (One Page Portfolio)
- TYM (とりあえずやってみよう) カードを参考にし、課題解決へのヒントを得て、見通しをもって探究に向かう。
- 自己評価をもとに「自分の学び方」を学ぶ力を育成する。



# 4. 研究の成果

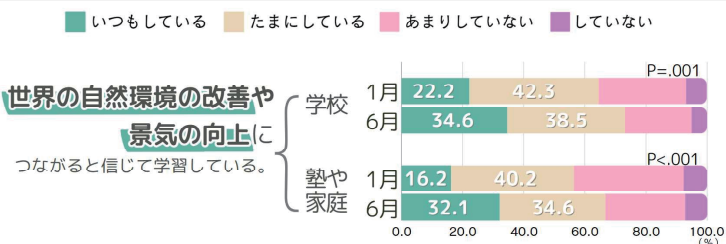
## OECD Future of Education and Skills

2030プロジェクトの方針に沿った意識調査より  
(令和6年1月、6月実施)

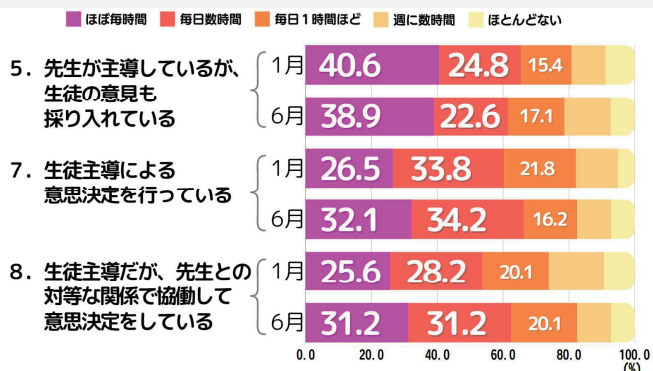


## OECD Future of Education and Skills

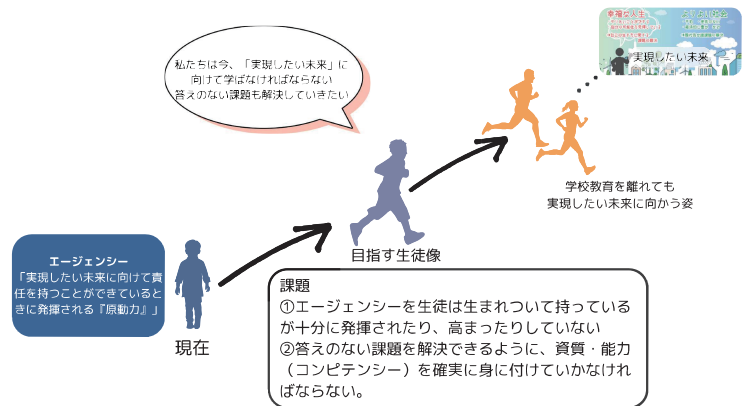
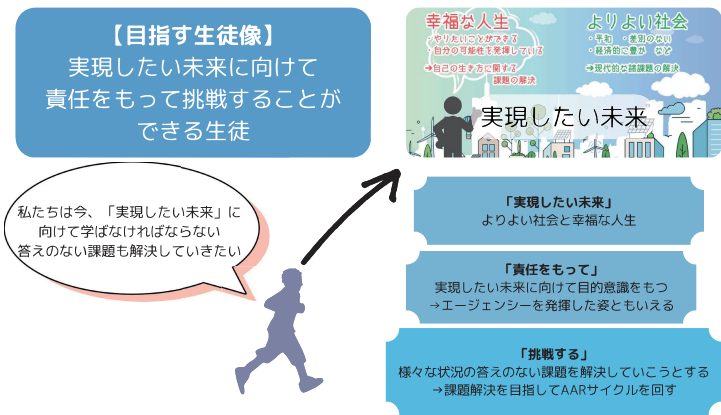
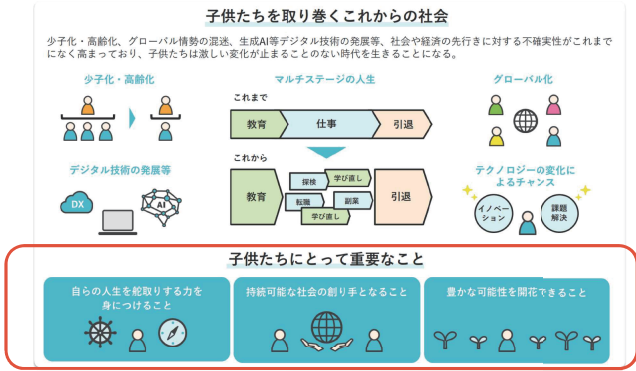
2030プロジェクトの方針に沿った意識調査より  
(令和6年1月、6月実施)



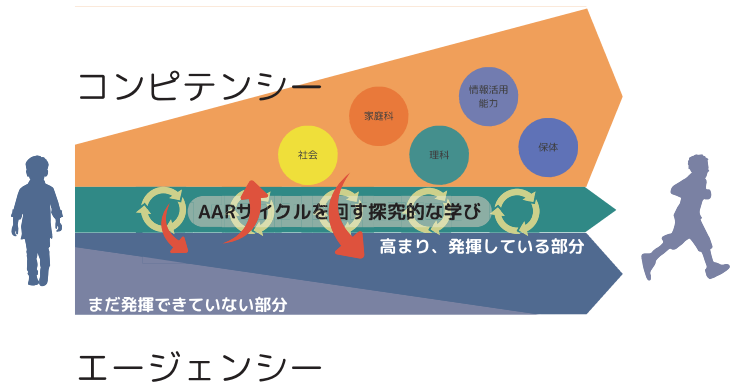
## 「太陽モデル」に沿った意識調査より (令和6年1月、6月実施)

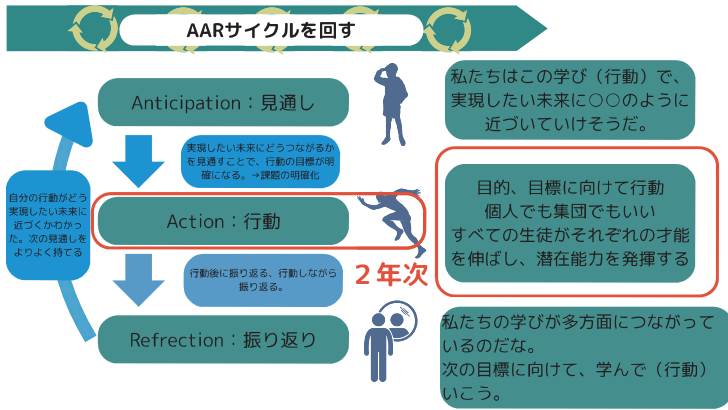


# 5. 今年度の見通し



# AAR サイクル





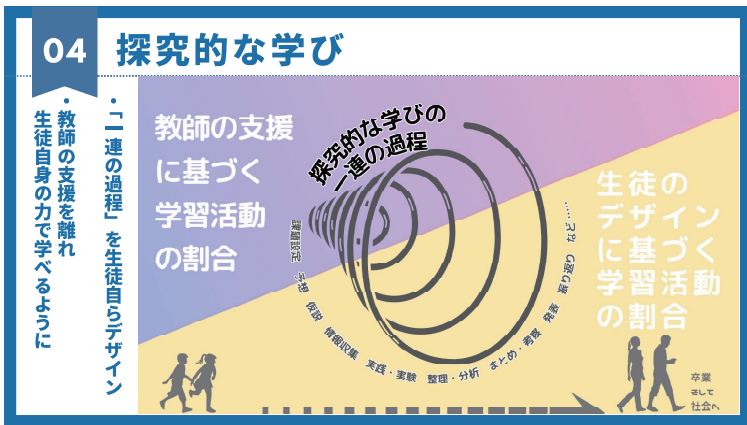
目的、目標に向けて行動  
 個人でも集団でもいい  
 すべての生徒がそれぞれの才能を伸ばし、潜在能力を発揮する

**学び（行動）の目標、目的**

ここを生徒自身がデザインする



何を、どのように  
 学ぶかを自分自身で設定することでエージェンシーも高まる  
 ※ここで、教科の本質に迫るような学習過程、探究である必要はある



## VI. 編集後記

### 「FD研修で広がる大学と附属学校部の連携」

副委員長 栗本 郁夫

「自ら人生を描き、共に未来を創る学び手の育成」

これは、令和8年度から附属四校園全体で取り組む研究主題です。令和6年度に附属学校部が設置され、令和7年度から活動が本格的に始動しました。この研究主題の統一、言い換えれば、附属学校部（附属学校園全体）で目指す子ども像の共通認識は、これからの附属学校園の魅力ある教育活動を進める上で、大変重要なことであると言えます。

従来からも附属学校園では、連携を重視して教育活動を行ってきましたが、各校園独自の教育方針や歴史もあり、本格的な一貫教育を進めることは理想ではありましたが、実現に向けてはなかなか難しい面もありました。しかし、附属学校部が設置され、特別支援教育を含む幼小中一貫教育が一気に進み始めたと言えます。また、大学との連携も同様で、今までも各校園それぞれが学部の先生方に依頼し、個別に連携を進めてきました。今後は、附属学校部として、四校園全体を見据えながら、様々な教育内容について連携し、充実を図っていくこととなります。

こうした背景も踏まえながら、今年度、大学教員と附属学校園で連携しながら、教員育成FD研修を進められたことは非常に意義があると思います。特に、教育実践者として、附属四校園の公開研究会を参観し、具体的な教育課題やこれからの教育の在り方について知見を広げることができたとともに、研修の協議の中で大学教員の専門的な実践に触れることができたことは、互いの教育活動を推進し、充実を図る上で非常に貴重な機会であったと思います。今後も、連携を重ねながら附属学校園を含む群馬大学全体の教育活動の充実・発展に寄与できればと存じます。

結びに、本年度の教員養成FD活動推進委員会の活動に御尽力いただいた紺谷正樹委員長をはじめとする運営委員の皆様、事務担当の皆様にご心より感謝申し上げます。